

富山大学人文学部平成 30 年度卒業論文

コミュニティハウス「ひとのま」のエスノグラフィー
——その「居場所」としての機能と支援スタイルについて考える——

人文学部人文学科
社会文化コース社会学分野
学籍番号 11510086
氏名 高屋 有沙

<目次>

第一章	問題関心	1
第二章	子どもや精神障害者にとっての「居場所」とは？——先行研究のレビュー——	
第一節	「居場所」の時空間について	2
第二節	「居場所」の構成要素	4
第三節	「居場所」と就労	6
第四節	まとめ——本研究の着眼点——	7
第三章	コミュニティハウス「ひとのま」とは	8
第四章	ひとのまの“支援”スタイル	12
第五章	利用者からみるひとのま	
第一節	ユキちゃんについて	15
第一項	基本情報	
第二項	就業（学業）の場としてのひとのま	
第三項	就労に向けた拠点としてのひとのま	
第四項	居場所としてのひとのま	
第五項	ユキちゃんにとってのひとのま	
第二節	ユリさんについて	20
第一項	基本情報	
第二項	Café なまけっけ について	
第三項	ひとのまでカフェを開くこと	
<コミュニケーションを取りやすい環境>		
<障害に合う環境>		
<自分のカフェを持つ責任感>		
<苦手な人への対応の変化>		
第四項	新しい職場	
第五項	ユリさんにとってのひとのま	
第三節	タカさんについて	32
第一項	基本情報	
第二項	宮田さんの見解	
第三項	ユリさんの見解	
第四項	タカさんにとってのひとのま	

第六章 考察	
第一節 先行研究再訪	38
第二節 その人なりの働き方を見つけていくためのひとのま	40
第三節 決断を迫らない場としてのひとのま	43
第四節 結語	45
＜注＞	46
＜参考文献・URL＞	47
＜図表＞	
図 1：ひとのまの間取り図	11

第一章 問題関心

富山県高岡市にコミュニティハウス「ひとのま」（以下ひとのまとする）という一軒家がある。そこでは不登校や引きこもりの子どもたちが集まるフリースクール、発達障害や精神疾患などで就業困難である人のサポートの場、近所のおじいちゃんや学校帰りの中高生がふらっと立ち寄る場として、さまざまな年齢、経歴の人が一緒に過ごしている。

本研究では、そのような場所としての複数の役割を果たすひとのまが、利用者にとってどのような「居場所」となっているのかを明らかにする。また、複数の役割があることから、支援のあり方には一見シンプルでも複雑なところがあるのかもしれない。ひとのまの理念や特長を明らかにし、どのような支援がなされているのかをもとに考察したい。

第二章 子どもや精神障害者にとっての「居場所」とは？——先行研究のレビュー——

第一節 「居場所」の時空間について

まず「居場所」の意義として、その時空間に着目した研究がある。

関谷（2007）は社会からの疎外感、活動性や生活への適応の低下などが大きな阻害要因となり、不安の強い精神障害者には、“場”自体があることがまず必要であるとしている。自分の身を置ける物理的な場があることは、その場での役割がもてない状況であっても、ひとまず周囲の目から逃れられ、不審に思われることを避けられる。いられることがあるということで自分自身にも周囲にも、社会の中での位置を保つことができる（という感覚がもてる）。物理的な居場所があることで「大義名分」が立ち、自分自身にも周囲にも面目が保てる。それは自己存在を保つことや他者との関係性をもつものにも役立つ。物理的な場にいっしょにいるということでおのずとやりとりが生じ、その結果関わりが生まれる基盤となる。それゆえ“場”が精神障害者にとって必要であり、「居場所」という空間に着目する必要があると考えられる。

佐川（2009）は不登校をめぐる支援実践について、フリースクール A の環境の管理も生徒の安心の喚起につながっていることを指摘しており、その環境について空間と時間の2つの側面から記述している。空間については、学校の教室のように整然と机と椅子が並べられていたり、物や景品が所定の場所に置かれたりすることはなく、それらの配置は支援者・生徒の行為に任せており、その都度変化する。また勉強部屋と遊び部屋という区分もなく、ある生徒が勉強している横で、ほかの生徒がおしゃべりやゲームをすることも珍しくないなど、その時々で空間は即興的に構築されていく。この環境は支援者と生徒との相互のやり取りの中で生み出されている。

一方で時間については、明示的なスケジュールや時間割、学習カリキュラムが用意されておらず、時間は生徒の希望に応じて多様に構成されてくる。生徒がそれぞれ別の教科を学習しており、支援者はそれぞれの進み具合に注意しながら、指導している。またフリースクール A では学年が存在せず、勉強の時間では年齢の異なる複数の生徒を教えることも珍しくない。指導のやり方についても支援者は学校で使われる教科書や参考書、問題集を用いつつ、雑談や雑学的な話を交えるなど、生徒の興味を刺激しながら、生徒が楽しく学習できる形を意識している。こうした勉強の時間は、主に午前中と夕方に「生じる」可能性があり、時間の長さの程度もその時々で生徒の状況によって異なる。このように時間はリジットに行為を規定していない。むしろ支援者と生徒の相互のやり取りの中で、場面のフレームはフレキシブルに次々と転換しており、そうした側面がここでの時間の構成の特徴を反映していると分析している。このようにフリースクール A は「整然とした」学校的環境と比べ、「ゆるい」雰囲気をもたえており、その柔軟な時空間の構成が、生徒の「落ち着き」、あるいは「安心」を生み出す実践＝環境であると述べている。

このように、物理的な「居場所」は社会的弱者である精神障害者にとって、シェルター

として機能し、「居場所」に行くことが彼らにとっての建前となること、そして他者との関係性をつくるきっかけとなることも機能として挙げられる。そして「居場所」における空間のフレキシブルさが子どもたちにとって安心感につながることも分かった。

第二節 「居場所」の構成要素

次に「居場所」という時空間を利用する人が、その時空間に対してどのように感じ、どのように意味づけるかが、その人にとっての「居場所」をつくる決定的な要素や条件となっていることが指摘されている。

住田（2003）は「居場所」の構成条件として、主観的条件と客観的条件を挙げている。主観的条件としては、子ども自身がホッと安心できる、そこに居る他者が受け入れてくれると確信できるという実感を持ち、そのような意味をその場所に付与することができなければならないとしている。一方で客観的条件は、関係性と空間性の二つに分類されている。関係性とは自己を承認し、再確認してくれるような他者との関係を指す。住田（2003）は、「居場所」には子どもと共感的な、同情的な理解や態度を示す他者との関係の必要性を述べ、他者との関係性が子どもの「居場所」の最も重要な要因であると指摘している。空間性については、子どもは安定的な他者との関係を通して確認できる自己受容感、自己肯定感、安心感、居心地の良さ、安らぎといった感覚的意味を、その関係が営まれている正にその空間に付与して、関係性と空間性を一体セットとして捉え、関係性と空間性が意味的に結び付けられ、一体的に組み合わされて「居場所」となると述べられている。

また住田（2004）は、子どもが居場所に安心感やリラックス感を持つことができるのは、そこにいる同世代の子どもたちが自分とおなじような立場・境遇にあって、そのために感情や現実認識を共有できるからであり、また問題を共有していることから互いに同情的な理解と支持を示して、相互に受容的となるからであるとしている。そのため、子どもは居場所のなかで自己受容と他者受容を経験し、問題は自分だけではないという安堵感とともに自身が受容されているという安心感・信頼感から自己に確証を持つことができ、自己安定感を持つことができる。こうして居場所に受容的態度が生まれる。この受容的態度こそが子どもの居場所の神髄だといってよいとしている。

木下（2018）は精神障害者が認識する「居場所」は自分のペースを保てるどころ、他者から尊重され自分を発揮できるところであり、このことから場所そのものも重要であるとしている。しかし、自分らしく貢献できているという思いや社会的役割を果たしているという思いなどが心の拠り所となっていることから、その場にいる時の精神障害者自身の気持ちの有り様が重要であると述べている。

関谷（2007）は、青年期に精神障害にかかり、回復し、現在就労中のケースにライフヒストリー・インタビューと反構造的な枠組みでの質問を行った。そこから得られた語りの中で、語られたことの転機となった出来事（転換点）に着目した。転換点となりその後の過程を支えていく力となった要因のひとつとして、障害者である自分を温かく受け入れてくれる“居場所”を挙げている。

以上より「居場所」の構成要素は4つに分類し関連づけてみたい。まずは受容感や受容的態度である。そしてその受容感、安心感や安らぎにつながる。また、その受容感、他者との関係性の中で構築され、他者からの尊重を感じることができる。そしてその尊重は

自己肯定感、そして社会的役割を果たすことにもつながる。このことより、筆者はこの 4 つの構成要素の中で基礎となるものは他者との関係性のなかで生まれる受容感なのではないかと考える。一方で関谷（2007）より、精神障害者の人生の転換期となった時点で「居場所」の存在があることから、「居場所」の存在が人生の方向性を手助けする条件の一つにもなる可能性も考えられる。

第三節 「居場所」と就労

第二節で「居場所」の構成要素のひとつとして挙げた“自己肯定感”は社会的役割を果たすことにもつながることを述べた。このように自己を肯定し、社会の一員としての基本的な自己への信頼を得る方法として就労がある。本節では「居場所」と就労の関係性についてレビューする。

木下（2018）は精神障害者が地域において自己の役割を確立するためには、地域で自己の存在価値を高めていく必要があり、自己肯定感を高め、社会復帰を目指していくための手段として就労が考えられるとしている。また、関谷（2007）も社会の一員であるという実感を個々人にもたらしめてくれるもののひとつが“就労”であるとしている。そして就労は社会とつながっているという感覚をもたらし、自己存在を価値あるものと意味づけるものであるとしている。また、社会の一員であるという実感は、自分が他者から必要とされているという自己存在への価値感や自己信頼感を支える。それがあからこそ喪失を抱え、いままでの人生や描いてきた将来展望への未練を抱えながらも、障害とともに歩み、新たな将来展望を見出していけると述べている。

そして関谷（2007）は、就労は生活を成り立たせてくれるものであり、自分自身の能力を確認するもの、生きがいともなり、生活のリズムをつくり、メリハリとなるものであるとしている。そして、働いて報酬を得るということは、社会からその役割を果たすものとして成果を認められている証であり、他者から認められているという感覚は自己への信頼感を支えるとしている。一方で三橋（2009）は「働く」ことが必ずしも労働の対価としての賃金をもらうことだけを指すのではなく、社会的貢献をしたり、生きがいややりがいにつながったりする「働き」を持つということも、その人なりの働きとして許容するとしている。

また、三橋（2009）は精神障害者にとっての「居場所」の役割を考えるうえで、精神障害者の就労支援の充実が重要課題であり、それと同時に精神障害者の生活支援の充実を考えていくことも重要課題であるとしている。

以上より、精神障害者にとって自己肯定感や自己存在価値を高めるための手段として就労がとらえられている。就労の効果として、社会の一員であるという意識をもたらしてくれるため、自己肯定感を高めることにつながる。つまり、就労と自己肯定感は相互に関係があるのではないかと考えられる。また「居場所」の構成要素のひとつとしても自己肯定感を確認できたため、広く考えると「居場所」も就労と相互につながりがあるのではないかと考えられる。一方で、三橋（2009）は、精神障害者の「居場所」の役割を考える前提として、就労支援の充実と生活支援の充実が挙げられている。そのため、就労の充実が「居場所」を構成することに結びつくことも考えられる。

また就労の効果として、自己肯定感を高めること以外に、自分自身の能力を確認すること、生活のリズムをつくること、社会における役割を果たすこと、生きがいややりがいにつながることを挙げられた。そのため、精神障害者の生活支援にも就労が有効な手段にな

るとも考えられる。

第四節 まとめ——本研究の着眼点——

先行研究のレビューを通して、以下 3 点が考えられた。

- 1) 物理的な「居場所」という時空間の必要性。
- 2) 「居場所」を意味づける重要な要素を、その「居場所」の利用者は、どのように感じているのかが重要であること。
- 3) 自己肯定感や自己存在価値を高める手段として、就労が考えられ、就労は「居場所」と関連性があること。

これらを本研究の着眼点としたい。

第三章 コミュニティハウス「ひとのま」とは

富山県高岡市にあるコミュニティハウス「ひとのま」は、2011年に代表の宮田隼（じゅん）さんと元島生（しょう）さんが空き家の一軒家を借りてスタートさせた。

宮田さんは当初、ひとのまの場所として商店街の空き家を探していたが、家賃10万円の物件しか見当たらなかった。その時知り合いから一軒家を紹介された。もともとこの家に住んでいた老夫婦が二人とも亡くなっており、家の所有権は息子にあった。宮田さんはその息子と話し合った。息子は宮田さんの「いろんな人が集まれる場所を作れたら良い」という考えに共感し、亡くなった老夫婦も近所の人を集めるのが好きだったということもあり、最初は家賃7万円と言われていた家賃を5万5千円に引き下げてもらえることになったという。現在その家賃については、利用者からの利用料で賄うことができている。

一軒家の一階には6畳と8畳の和室と台所がある。（図1参照）床の間には座卓が2つと貰い物の大きなテレビがある。ほかにも衝立や一人掛けのソファなど、来る日によってレイアウトが違う。訪れる日は毎回その大きなテレビで男の子5人ほどがテレビゲームをしている。2階には6畳の和室が3つある。そこでは勉強をするスペースなのか、たくさんの教科書や漫画が置いてある。これらの家具や本、おもちゃ、ゲームはすべて寄付であるそうだ。

ひとのまは火曜日が定休日、木曜日は利用者のひとりのユリさんがひとのまの台所を借りてカフェを運営している。利用料は1回300円で、玄関に置いてあるビンあるいは箱に入れる。以下はある日のノートである。

一階では10人くらいの人がそれぞれ遊んでいた。年齢も小学生から高校生くらいまで様々なように見えた。4、5人でテレビゲームをしていたり、ジグソーパズルをしていたり、1人でタブレットでゲームをしている子もいた。（中略）途中から小学生くらいの男の子と女の子がこちらの輪に混ざってきた。詳しくは聞いていないのだが、多分不登校？すごく元気で明るい子で、高校生達に向かってもズバズバと発言していた。年は離れていだが、そばから見ても仲がいいんだなと思った。（2017.5.17 フィールドノート）

ひとのまを設立した経緯は、引きこもりや不登校を担当していた宮田さんの家庭教師の経験からである。以下は宮田さんの語りである。

塾の先生やってたら、不登校の子がいることがまあよくわかるじゃん。それで不登校の子と話をしていたら、まあ学校に行っていないから行くところないじゃない。そういう子たち集めてたら、次に来る相談が20代の息子が引きこもっていて困っているんだけど、みたいな親御さんの相談が来たりだとか。そういう相談が結構来たりする。じゃあそういう人が日常日ごろ外に出れる場所があったらいいよなーってなんとなく思ってたの。生きてたらいろんな人の話聞いてたら、昼どこも行くところがないって人結構いること

がなんとなく分かってきて、おじいちゃん、おばあちゃんとかね、あと子育てしている母ちゃんとかね、ふらっと入れるところがあったらいいわって話も聞いてたしね。じゃあ、一軒家借りて、誰でも来ていいよって言ったら来るんじゃないか？っていう感じ。

(2017.5.17 インタビュー)

このように宮田さんは自身の家庭教師経験から不登校・引きこもりの実情を知り、彼らの居場所、そして彼らだけでなく誰もが集える場を作ったのである。

現在のひとのまの利用者は様々である。不登校や引きこもり、精神疾患や軽度の障がいを持っていて働くのに波がある人、近所の高齢者など基本的に誰でもよい。一日のプログラムは特になく、ゲームをしたり、雑談をしたり、お絵かきをしたりなど自由に過ごしている。精神疾患や障がいで働くのに波がある人たちはここで趣味のコーヒーを淹れる練習やマッサージの施術をし、趣味の場や商売の場として活用している。ひとのまの一日の利用者は、日によってメンバーが変わるため、宮田さんは完全に把握していないがだいたい20~30人である。その4割が不登校、3割が精神疾患など障がいで働けない人、その他が近所に住むおじいちゃんや生活保護受給者などである。

ひとのまへの行政からの活動援助や資金援助などは直接的にはないが、行政からの生活保護のシェルターとしての依頼や、逆にひとのままで生活保護を受給したいという相談を宮田さんが受け一緒に行政へ行くなどはあるようだ。

以下はひとのまの基本概要である。

住所：高岡市東上関 389

利用時間：10：00～17：00

定休日：火曜日

料金：一般 300 円/日

会員：3000 円/月（月会費：3000 円、年会費：10000 円、貸し切り利用料：5000 円）

代表：宮田隼（じゅん）さん、元島生（しょう）さん（共同代表）

宮田さんはひとのまについて以下のように語っている。

僕は一軒家を開けているだけなので。ただ月水金の10時から5時はここにいる。でもただそれだけ。偉くもなんともないし、逆に多くを頼られても困る。(中村2016(注1))

何が大事かっていうと、常に場所が開いてて、誰でも来ていいよって言い続けること。

(NHK2017)

このようにひとのまでは、常に場所が開いていて誰でも入ることができることが当たり

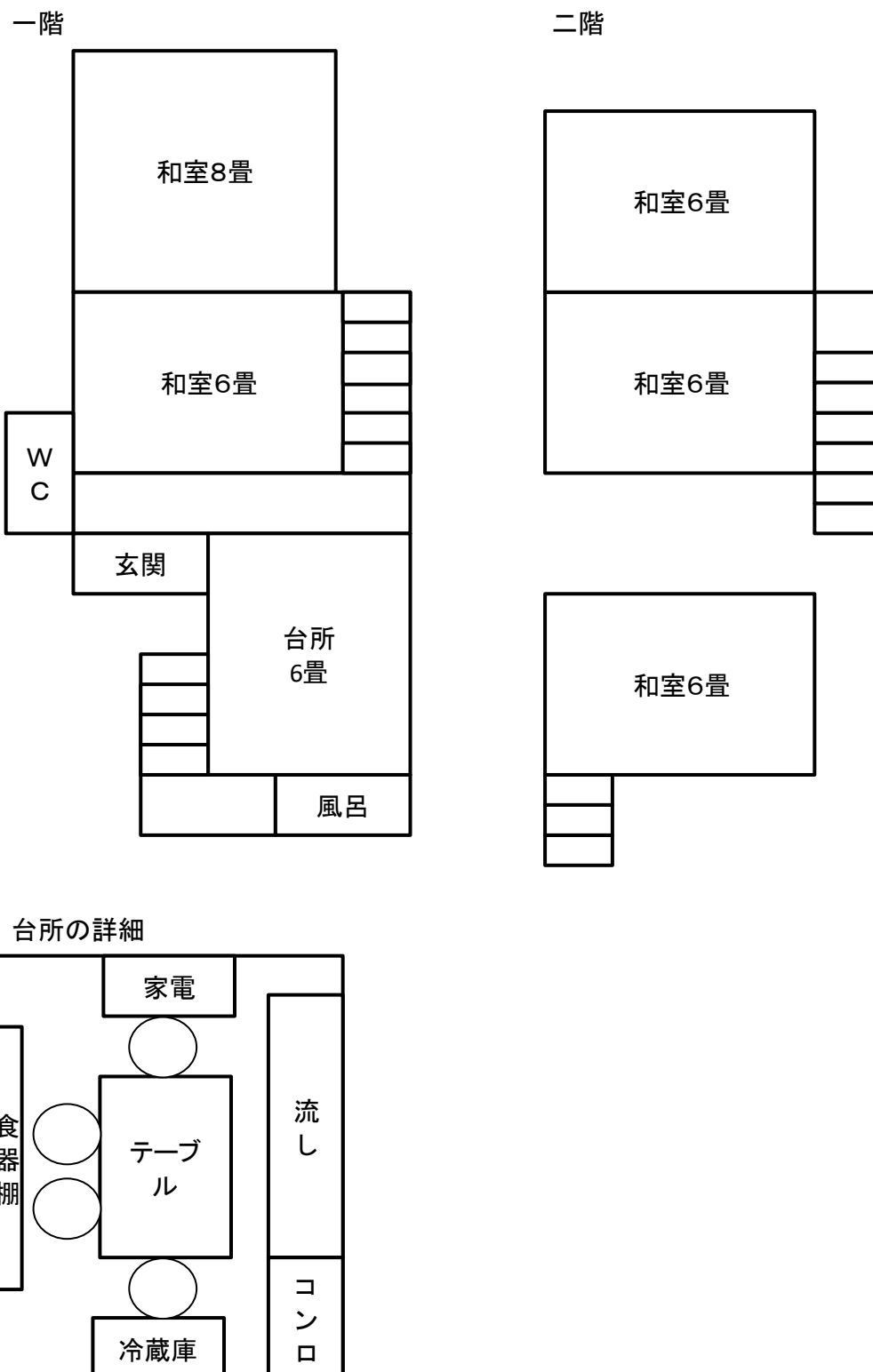
前となっており、そのことが宮田さんは重要だと感じている。様々な経歴を持つ人が日替わりで集まり、ひとのまで一日のほとんどを過ごす。ひとのまでのその日の過ごし方も人それぞれである。特にルールが決まっているわけでもなく、宮田さんは「人と人が勝手につながっていくといいな」(中村 2016) と話している。

また、次の宮田さんの語りからひとのまでの生活が利用者にとって、かしこまっていない日常的な場であることが分かった。

ここ (ひとのま) で見ると、ちゃんとしなきゃいけないと思っているやつは一人もいない (笑)。ここでは、しんどそうにしているでも大げさに頑張れとも言わないし、邪魔だよとも言わない。「まあまあそんな時もあるっしょ、俺もそんな時あるし」と。それが健全だなと僕は見えて、そういう場所を目指したい。(中村 2016)

ひとのまは特にルールもなくその日の予定もない。日によりメンバーも違う。そのような形式ばっていない場所だからこそ、日常性があふれ、自由な空間となっている。それゆえ常に誰かにとっての居場所となっているのかもしれない。

図1：ひとのまの間取り図



第四章 ひとのまの“支援”スタイル

宮田さんは支援について、以下のように語っている。

俺は困っている人を助けたいんじゃないで、それよりも別に手伝うことは手伝うと。ただ俺が解決しようとは思わない。自分で乗り切ったねというやつの横にはいたいけど、俺が先頭に立って、宮田さんのおかげで、みたいなのはまっぴらごめんだと。だって自分の人生じゃんね。舵取りは自分でとりたいわけじゃんね。(NHK2017)

宮田さんは自分が支援者だという認識はないそうだ。また、「支援する側される側っていちいち区別しなくてもいいんじゃないかなって思ってる」(2017.5.17 インタビュー)や「相談を受ける人だとあんまり思われたくない」(2017.6.16 インタビュー)とも語っている。なぜそのような発想に至るのか。

不登校の子の話なんか聞いてると、学校どころじゃなくって、実はもっと大きな問題を抱えてるんだけど、学校行かなきゃいけないって言われるもんだから学校に行くしかなかったと。それを引きずってひきこもってる人もいっぱいいるわけで。

そんなときに自分で選択できてたら全然違っただろうなって。心配だからっていう親心はわかるけれども、でも本人の気持ちと違う方向に持ってこうとすることの方が、逆にリスクは大きいというか。

じゃあ親なんか信用できないって親との関係を遮断しちゃうとかの方が大ごとだから。だったら失敗するのは明らかに目に見えてわかるんだけど、どう考えても失敗するだろうって思うようなことでも、本人がそうだって言ってんだったらって。失敗したときにじゃあどうするかって話をした方が僕はいいんじゃないかなって個人的には思ってる。(2017.6.16 インタビュー)

困りごとは解決しなくてもいいと思っているところがあつて。問題が解決することはあまりない。問題が解決しなかったとしても、ひとりで抱え込まなくなっていたら、解決はしないけど軽くはなっているというので僕はいいと思っでいて。(NHK2017)

ひとのまで多くの人と接しています。様々な事情を抱えて、いわゆる「困りごと」と接する機会も多いです。友人としてできることをできる範囲でやっていきます。僕だけじゃなくって、来てる人みんなで。それで6年やってきました。(宮田 2017)

宮田さんが受ける相談は「誰も触れたくないような正真正銘の困りごと」である。そのような困りごとが簡単にかつ、完全に解決されることはあまりないそうだ。それでも宮田さんは相談者に寄り添いながら、宮田さんはあくまで補助的な立場で「自分で選んで、自

分が進んで、自分で結論に納得できる人生を歩んでいけたらそれでいい」(2017.6.16 インタビュー) というスタンスのもと話を聞いているという。

また、宮田さんはこのような相談を「人付き合いの延長」や「ただの趣味」と話す。人付き合いだからこそ誰にも話せないような悩みを相談できる。そして完全に困りごとが解決することよりも、ひとりで悩まないことや悩みが少しでも軽くなることを重視している。これらはサービスの一環ではなく、宮田さんと相手との人間関係の上で成り立つものではないかと考えられる。

次は、宮田さんの不登校・引きこもりへの支援について述べる。宮田さんの不登校や引きこもり支援は、宮田さんの生い立ちに起因している。宮田さんは親と4人兄弟の母子家庭で育つ。生活は苦しく、食べ物に困ることもあった。小学3年生の時に児童相談所に身を寄せるが、周りの大人たちに本音を打ち明けることはできなかったようだ。以下は語りである。

(児童相談所の人に本音を) 言えるわけがなくて、全然知らない、きれいな服を着た人たちにかわいそうだと思われたくないというのが一番強くて。唯一つらい思いを言えたとしたら、改まった場所ではなくてたぶん日常の会話の中でぼろっと出てくるものなのかなと思ってて。(NHK2017)

宮田さん自身の経験から、本音を言えるのは日常会話の中であるとわかる。このことが宮田さんの不登校や引きこもり支援の根幹部分になっているように思われる。

俺最初に(引きこもりの子に)家庭訪問とかもするの。で、遊ぶ。なんかゲームしようぜって。でやる。で、仲良くなる。俺なんか来るの面倒くさいから、お前(ひとのま)来ない?って話したら、じゃあって話になって来る。(2017.5.17インタビュー)

俺、あんまり不登校になった理由とか聞いてないの。自分から聞くんじゃなくて、仲良くなったらいつか言うでしょ。(2017.5.17インタビュー)

このように宮田さんは引きこもりの子の日常生活に溶け込んだり寄り添ったりすることで、コミュニケーションを図り、信頼関係を築こうとしている。このことも宮田さんの支援よりも人付き合いの延長という理念が関わっているのではないか。

以上の宮田さんの支援についての語りより、ひとのまの“支援”スタイルには3つの特徴があることが分かった。1つ目は宮田さんは自身を「支援者」だと思っておらず、支援する側、される側の区別の必要性を感じていないことである。2つ目は相談された困りごとは必ずしも解決する必要性はないと感じている点である。3つ目は話しやすさへのこだわりである。宮田さんは相談を「人付き合いの延長」と語るように、その人との関係性を重視し、相談者が自分から困りごとを語り始めるまで宮田さんからは聞かないようにしている。まとめると、ひとのまの“支援”スタイルの特徴は宮田さんの相談者の信頼関係の上で構築されているものであり、無理に解決しない、悩みを聞き出さないという一種の“ゆとり”がある場をつくる点が重要と感じられた。

第五章 利用者からみるひとのま

第一節 ユキちゃんについて

第一項 基本情報

ユキちゃんは、24歳のころからひとのまに通り始めて現在28歳。軽度の障害がある。

ユキちゃんは中学校を卒業後、15から17歳まで料理の専門学校へ通っていた。その後18から23歳まで自動車学校へ通いながら、ハローワーク、ヤングジョブとやま、「花椿いろは」（以下「いろは」とする）という障害者向けの就労移行支援事務所や、「いろは」に併設されている「障害者サポートセンターきらり」（以下「きらり」とする）という、障害者の就業・生活を支援、相談を行っている施設などに出かけていた。24歳の時に、「きらり」から県内の定時制高校A（以下A高校とする）とひとのまを紹介され、3年間通い続ける。27歳ごろまで平日はほぼ毎日ひとのまに通いながらも、高岡市にある高岡地域若者サポートステーション（通称「たかサポ」）やハローワーク、ヤングジョブ富山など、多くの就労支援機関に週に数回程度通っていたが、現在はそれらの就労支援機関にほとんど通っていないようだ。

ユキちゃんの実家は整骨院で、お父さんが柔道の整復師である。そのため、ユキちゃんはマッサージ師になるという夢を持っている。またマッサージに携わる仕事がしたいそうで、様々な資格を取得すること、マッサージの専門学校へ通うことも目標としている。

第二項 就業（学業）の場としてのひとのま

ユキちゃんは中学校卒業後、ハローワークやヤングジョブ富山で就職を探していたが、軽度の障害があるためなかなか就職先が見つからず、また母親がユキちゃんの障害を認めなかったこともあって、障害者としての就労支援にもつながらずにいた。

そこでユキちゃんは、自分で障害者の就業支援を行っている「いろは」を調べ、6年間通うが、まずは高卒の資格を取ることを勧められたため、「いろは」からA高校への進学を勧められる。しかしA高校は、学力的な問題と、ユキちゃんの先生を独り占めしたいというマンツーマン志向の性格を理由に、通学が困難だと判断した。

そのA高校は、もともと数々の不登校の子を受け入れていた。その関係で宮田さんもA高校の生徒たちと接することが結構あった。また、その当時のA高校のセンター長と宮田さんは面識があった。そこでA高校のセンター長から宮田さんへ、ユキちゃんはひとのままでレポートを作成し、宮田さんが添削するという形でならユキちゃんのA高校への入学を認めることができ、そのためにもひとのまをA高校の提携校扱いにさせてほしいという依頼もあった。そこで、宮田さんはひとのまをA高校の提携校とし、ユキちゃんのレポート指導を行うようになった。そして3年後、ユキちゃんはひとのままで無事に高校卒業の資格を取ることができた。

また、ひとのまに来る不登校の子の親御さんの一番の心配事は、中学校卒業後の進路であるという。ユキちゃんが先駆けとなり、ひとのまが A 高校の提携校となったため、ひとのまに通いレポートを提出することで高校卒業の資格を取得することができる。そのため、ひとのままで親御さんの心配事も解決できる可能性もある。

第三項 就労に向けた拠点としてのひとのま

なぜユキちゃんは「きらり」、「たかサポ」、ヤングジョブ富山、ハローワークなど多数の就労機関へ通っているのか。それはユキちゃんが健常者と障害者のボーダーラインにいることにあった。

ユキちゃんは母親が障害を認めていなかったこともあって、障害者としての支援につながることでできず、中学校卒業後、働けない状況が続いていた。そこでユキちゃんが見つけたのが、障害者の就業支援を行っている「きらり」だった。しかし「きらり」では障害者の診断を受けていないユキちゃんへの対応は難しく、適切な処置ができない状況が続いた。そこで「きらり」が進めたのは、「たかサポ」である。しかし「たかサポ」は、若者の社会的自立を目的とした、障害者というよりも主にニートや引きこもりを対象とした施設であるため、ユキちゃんの場合、まずは障害の治療や障害者向けの就労センターへ通うことを勧められてしまう。

宮田さんは「ユキさんは障害者の診断を受けていないせいで、様々な施設にたらいまわしにされやすい、またはたらいまわしにせざるをえない特殊なパターンである」（2017.7.7 インタビュー）と語る。実際に宮田さんは、ユキちゃんに障害者としての就労を勧めるため、宮田さん、ユキちゃん、ユキちゃんの母親で「きらり」へ行って話す機会を設けたそう。しかし、結局母親がユキちゃんの障害を認めず、その話は流れてしまった。また、母親はいまだにユキちゃんを障害者だとは認めず、逆に娘を障がい者にされると怒ってくるそう。そのような状況下で、宮田さんは、ユキちゃんの母親との関係を壊さずに、ユキちゃんへの就労支援をひとのまを拠点として行っている。

また、ユキちゃんはマッサージ師になりたいという夢を持っている。しかし、マッサージ師になるには国家資格が必要で、ユキちゃんには現実的に難しいかもしれない。しかし、ユキちゃんはマッサージの練習として、ひとのままで利用者にマッサージの施術を行っている。このように本格的ではないが、ユキちゃんのマッサージ師になりたいという夢を形にできる場としても、ひとのまはユキちゃんの就労をサポートしているといえる。

第四項 居場所としてのひとのま

ユキちゃんは高校卒業の資格を取得し、その後就職活動があまり進んでいないにも関わらず、毎日のようにひとのまに通っている。これはユキちゃんにとってひとのまには居心地の良さがあるからではないだろうか。ひとのまがユキちゃんにとっての「居場所」となっていると考えられる点として3つ挙げる。

1つ目は、ひとのまにはユキちゃんの役割がある点である。ユキちゃんは、ひとのまに人がいないときに掃除や洗濯、ゴミ出しをしている。それらはユキちゃんの役割として決まっているわけではないようだが、やる人がいないためユキちゃんは「お手伝い」として率先してやっているという。また、宮田さんがひとのまにいないときに、ユキちゃんが電話を取ることがある。しっかり相手側の要件を聞き出し、宮田さんがいつごろ戻るかを相手に伝えることができていた。そして、宮田さんがひとのまに戻ってくると、電話があったことを宮田さんに伝えることができていた。

2つ目は、ひとのまではユキちゃんが周りから受容されていると感じている点である。ひとのまに来るまで、ユキちゃんは数々の行動を起こしてきたが、改善策が見つけれなかったり、母親が十分なサポートをしてくれなかったりなどでなかなか進展がなかった。しかしひとのまに来て宮田さんと出会い、先述したが、ユキちゃんはひとのまでマッサージの施術を行っている。宮田さんは「『いやいやユキさんマッサージなんか無理だよ』っていうのは…。まあ実際やってみないとわかんないから。」(2017.7.7 インタビュー) というように、ユキちゃんのできる、できないに関わらず受け入れている。

高屋：ひとのまの人たちってというのは、ユキちゃんのマッサージ師になりたいっていう夢を応援してくれているってことですか？

ユキ：もちろんそうだと思うんだけど、やっぱり社会のことも考えとるし。いつまでたっても自立できないとかそういうことになったら、ちょっとダメやし。自立するのにちょっと時間もかかるみたいな感じだから。(2017.7.7 インタビュー)

この語りから、ひとのまの人たちはユキちゃんのマッサージの夢を応援してくれているとユキちゃんは感じており、そのために自分は自立しなければならない、と気持ちを奮い立たせてくれる存在でもあることが分かった。

以下は、ある日のノートとユキちゃんの語りである。

ユキちゃんはひとのまで楽しいことについてイベントを挙げ、紙に書いてくれた。ほぼ全部のイベントに参加しているようだ。(2017.6.1 フィールドノート)

ひとのまのいいところって、いっぱい人が来るからなんか盛り上がるというか、そういう大きな行事。今年は学園祭が6周年だから、わたしは不在やけど。ちょっと…残念ながらって感じかな。ははは。(2017.7.7 インタビュー)

これらの語りから、ひとのまでは、ユキちゃんの周りにはたくさんの方がいて盛り上げてくれることでユキちゃん自身も楽しさを感じることができていることがうかがえる。また、ユキちゃんは2017年度の学園祭に出席できず悔しがっていることから、ユキちゃん

はひとのまに楽しさを見出していると考えられる。このように、自分の好きなように過ごすことのできるひとのま、様々な人が集うひとのまだからこそ、ユキちゃんに楽しさや受容感を与えることのできる場所になっていると考えられる。

3つ目はひとのまに来ることがユキちゃんの日課、活動の拠点となっている点である。ユキちゃんは、実家からいつも決まった時間の電車に乗り、ひとのまに来ている。午後から「たかさぽ」などのほかの場所へ用事がある日も、午前中はひとのまに来て、そこから「たかさぽ」へ行く。また、木曜日は宮田さんがひとのまにいないため、他の曜日と比べ、利用者数は比較的少なく、また利用者の年齢層も高くなる曜日である。利用者の多少や年齢層に関わらず、どのような日であってもユキちゃんは、ひとのまに通い、午前10時から過ごし、帰りの電車に間に合うように午後5時ごろひとのまを出る。

このように、ユキちゃんは他の用事がある日でも、必ずひとのまをその日の活動の経路地としている。ユキちゃんのこれまで、そして現在の日常生活において、ひとのまが与える影響は大きく、「居場所」となりえるのではないかと考えられる。

第五項 ユキちゃんにとってのひとのま

第二章第四節では、本研究の着眼点として、1) 物理的な「居場所」という時空間の必要性、2) 「居場所」を意味づける重要な要素を、その「居場所」の利用者はどのように感じているかが重要であること、3) 自己肯定感や自己存在価値を高める手段として就労が考えられ、就労は「居場所」と関連性があること、の3点を挙げた。これらを、ユキちゃんがひとのまに対して持つ、「居場所」観と照らし合わせたい。

まず、物理的な「居場所」の必要性について述べる。ユキちゃんは健常者と障害者のボーダーラインにいるため、ひとのまに来る以前までは、複数の就労機関の間でたらいまわしにあっていた。しかし、「誰でも来てよい」というスタンスのひとのまは、そんなユキちゃんのセーフティネットやシェルターとして機能したといえる。そのため、関谷（2007）の指摘する、社会からの疎外感を感じるものにとっての“場”そのものの必要性が、このユキちゃんのケースに当てはまると考えられる。そのため、就労機関に通うも、就労が思うように進んでおらず、行き場のないユキちゃんにとって、ひとのまは就労機関に代わる「居場所」となった可能性が考えられる。

また佐川（2009）は、不登校をめぐる支援実践について、スケジュール、時間割、学習カリキュラムが明示的でないことを明らかにし、生徒にとっての「居場所」となりえる、時空間のフレキシブルさが、「ゆるい」雰囲気をつくり出し、生徒の「落ち着き」や「安心」を生み出すことを指摘している。ユキちゃんがA高校を通学困難だと判断された原因のひとつに、ユキちゃんは先生を独り占めしたいというマンツーマン志向であることがあった。ひとのまは毎日のスケジュールが決められておらず、数人の子供たちがゲームをしている傍ら、同じ空間に一人で勉強をしている子供もいる。このようなひとのまの時空間の柔軟性、そしてひとのまの“支援”スタイルの「話しやすさへのこだわり」が、ユキちゃんの

マンツーマン志向に合っており、普通の高校では通学困難とされても、ひとのまでなら、高校卒業の認定を取得できたのではないかと考えられる。

次に、ユキちゃんはひとのまという「居場所」をどう意味づけているのかについて考察する。木下（2018）は「居場所」とは、自分のペースを保てる場所、他者から尊重され、自分を発揮できる場所であり、自分らしく貢献できているという思いや、社会的役割を果たしているという思いなどが、心の拠り所となっていることを指摘している。ユキちゃんはひとのまで、掃除、洗濯、ゴミ出しといった役割を持っていた。このことは、ひとのまの一員として役割を担うことで、他者から尊重され、自分を発揮し、さらには自己肯定感を高めることにもつながるのではないかと考えられる。つまりは、社会的役割を担うことが、自分が周囲の役に立っていると自己受容でき、自己を肯定できる要因にもなるため、その受容感や肯定感が、ひとのまを「居場所」として意味づけるひとつの要因になっているのではないかと考えられる。

木下（2018）は、精神障害者が自己肯定感を高め、社会復帰していく手段として就労を考えている。ユキちゃんの夢は、マッサージ師になることである。ユキちゃんはこれまでに複数の就労支援機関に通っていたが、このマッサージ師になるという夢を、唯一受け入れているのは、ひとのまだけであり、ユキちゃん自身、ひとのまの人たちは、自身の夢を応援してくれると感じている。木下（2018）は、自己肯定感を高め、社会復帰をしていくための手段として就労を考えている。宮田さんをはじめ、ひとのまの人たちはユキちゃんの夢を応援している。このことがユキちゃんにとって、自分の夢をあきらめずに、また、自分自身を肯定することにつながっていると考えられる。ユキちゃんがマッサージ師になることで社会復帰するためには、まだまだ試練がありそうだが、できる・できないにかかわらず、ユキちゃんの夢を受け入れているひとのまは、ユキちゃんにとって、夢をかなえることのできる場としての「居場所」として機能しているのではないかと考えられる。

また、関谷（2007）は、就労は生活を成り立たせてくれるものであり、生活のリズムをつくり、メリハリとなるものであるとしている。ユキちゃんは、毎日決まった時刻の電車に乗り、ひとのまに通っている。ひとのまに通うことが、ユキちゃんにとっての就労であるとは言い難いが、ユキちゃんが、毎日決まった電車でひとのまに通っていることは、生活のリズムをつくっていると考えることができる。そのため、三橋（2009）の就労支援の充実と生活支援の充実は、「居場所」の役割を考える前提となるという考えに当てはめると、ユキちゃんにとってひとのまに通うことは、生活の一部となっているため、ひとのまはユキちゃんにとっての「居場所」となりえていると考えることができる。

第二節 ユリさんについて

第一項 基本情報

ユリさんは、現在 31 歳。障害（自閉症、アスペルガー症候群を含む）を持っている。精神障害者保健福祉手帳 2 級（厚生労働省によると、「精神障害であって、日常生活が著しく制限を受けるかまたは日常生活に著しい制限を加えることを必要とする程度のもの」）を取得している。ひとのまの台所で毎週木曜日に「Café なまけっけ」を開いている。

ユリさんは 20 代前半のころカフェでアルバイトをしていた。そこではコーヒーは作らず、デザートなどの盛り付けなどを担当していた。しかし、そこでのスタッフとの人間関係が上手くいかず辞めてしまう。その後は、家にひきこもるという生活を繰り返していた。

その時に初めて一人旅をし、京都へ出かけた。しかし下を向いてぐるぐるとまわってばかりだった。そこであるカフェに入った。そこでのスタッフの働きぶりを見てみると「自分はカフェではやっていけない」と思ったそう。しかし、自立したいという思いから、カフェではないところで働くことを決意。

その後、25 歳ごろ（2012 年）に、ハローワークへ行き、ホームヘルパー 2 級の資格を取り、訪問介護の現場で正社員として働くが、そこでも人間関係が上手くいかなかった。このころ自分は「発達障害に当てはまるかも」と感じ、心療内科で診断を受けると、自閉症スペクトラムと診断され、アスペルガーの傾向もあるとされた。しかし、「診断されてもどうすることもできない」と感じ、その後も介護の仕事が続けたが、介護の現場でも人間関係で上手くいかなかったそう。

2012 年 9 月にユリさんは、訪問介護の訪問先の家族に、ユリさんの言動から発達障害なのではないかと疑われ、「Y's さくらカフェ」を紹介された（以下「さくらカフェ」とする）。そして、ユリさんはそこで開催されていた「生きづらさを語る会」に参加する。「さくらカフェ」は富山 YMCA が運営しているコミュニティカフェであり、そこでは不登校、引きこもりの子などがスタッフとして働いており、ひとのまの利用者も利用していることが多い。そこで開催された「生きづらさを語る会」は、発達障害や不登校など、人付き合いが苦手な人が参加する会で、ユリさんが参加した時は、ユリさん含め、4 人でテーブルを囲んだ。そこで話した内容は覚えていないそうだが、そこで初めて友人が出来、その時のことについて「自分と同じ境遇の人がいたことに気分が高揚し、感動と安心で泣いた。」と語っている。また、ユリさんはこの「生きづらさを語る会」でご主人と知り合うこととなる。彼も障害を持ち、同じ介護の職であったため意気投合したそう。

その後ユリさんは「さくらカフェ」に通いながら、その利用者から「ひとのま居酒屋」を紹介される。「ひとのま居酒屋」とは、ひとのま利用者が自分たちで酒を持ち込み合っ、お酒を楽しむイベントだ。そこでユリさんはひとのまを知り、2012 年 10 月ごろからたまにひとのまに通うようになった。「ひとのま居酒屋」についてユリさんは、「いろいろな（生きづらさの）種類の人が出て、居心地が良い。」と語っていた。ここでも特にどんな話をし

たのかは覚えてないそうだが、「(ひとのまでの) 空間を楽しんでいた。」と言う。その後もユリさんはひとのまにちよくちよく足を運ぶようになる。

その後ユリさんは結婚し、複数のデイサービスで働いた。しかし 5 日や 1 週間と短期間で解雇されてしまう。「あなたの扱いにみんな困っているんだよ」「いるだけで疲れる」などと怒られたそう。その後は障害者手帳を取得し、障害者として就労支援を始めるも、またも人間関係が原因で長期的に続けることはできなかった。

ユリさんはデイサービスを解雇された後、すぐに夫に電話したそう。その時に夫はちょうど「みやの森カフェ (注 2)」で B さんと会っていたようで、夫は B さんにユリさんのこれまでのいきさつと、ユリさんはコーヒーを淹れることが得意であることを話すと、B さんは「そういうのがあるなら伸ばせばいいじゃない」と言い、「みやの森カフェ」のイベントでコーヒーを出すことになった。B さんは「みやの森カフェ」の運営主体である、一般社団法人「Ponte とやま」の理事で、発達障害の就労に明るく、「みやの森カフェ」も運営している。そのイベントは発達障がいの子をもつ親のイベントで、参加人数は 8.9 人ほどだった。ユリさんはコーヒーやカフェラテを提供したが、現在と比べても道具はそろっておらず、今なら温かいの飲み物に必ず付けるラテアートも、当時はできなかった。しかし、それを機にユリさんは「やっぱりこういう仕事がしたい」と思えるようになった。「みやの森カフェ」は交通の便が悪かったため、ひとのまでカフェを開くことを決め、宮田さんに相談すると「好きなようになってくれ」ということで軽く OK をくれたそう。

そして、2016 年の夏からひとのまで「Café なまけっけ」を開くようになり、現在に至る。また、ユリさんはひとのまに来る日以外は、週 3~5 日食堂でパート勤務をしている。ユリさんはパート勤務を仕事のメインとしており、なまけっけでは元が取ればよいとしている。なまけっけを始めた当初は、機械を使わず手で豆を挽いており、メニューも現在と比べて少なく、コーヒー代ももらっていなかった。しかし「コーヒー代を払わないと飲みづらい」という声もあり、一杯 100 円にすることにした。

第二項 Café なまけっけ について

「Café なまけっけ」は 2016 年の夏にユリさんの夫の勧めでオープンした、ひとのまの台所で営業しているカフェである。2017 年までは毎週水曜に営業していたが、水曜日はひとのまの利用者が多く、ユリさん自身人ごみが苦手なこと、自分で一度味見をして自分の納得のいくコーヒーを提供したいという思いから、2018 年からは宮田さんがひとのまに来ないため、比較的用户者の少ない木曜日に営業日を変更した。営業時間は 13:00~17:00 ごろである。

ドリンクの注文方法は次の通り。まず注文者は台所へ来て、ユリさんに注文をする。ユリさんは注文を伝票にメモし、コーヒーを作り終わると、ドリンクを折り紙で作ったコースターの上に載せ、折り紙で作った小さな箱に入れたビスケット 2, 3 枚と一緒に、台所や居間にいる注文者の元へ運ぶという流れになっている。

最初のころの客はユリさんの友人だったが、現在はひとのまの利用者がほとんどで、それ以外は宮田さんに相談に来た人である。それ以外に、ひとのまの外から来る客はほとんどいないそうだ。

ドリンクのメニューは全部で 10 種類。(下記参照) 最初のころはエスプレッソとモカだけだったが、今年に入ってひとのまの利用者には子供が多いため、ココアやミルクをメニューに追加したり、ドリップコーヒーなど新たなメニューも増やしたりするようになった。また Hot を注文すると、簡単なラテアートもついてくる。

<メニュー>

ドリップコーヒー、直下火コーヒー、カフェ・オーレ、カフェ・ラテ、キャラメル・ラテ、チョコレート・ラテ、ダブルラテ、ココア、ミルク、紅茶 (いずれも Hot、Ice あり) 限定ドリンクあり、注文に合わせてメニューにないドリンクを作ることも可能。テイクアウトも可能。

ドリンクは一杯 100 円。ただし初回は無料にしている。その理由としてユリさんは、「いろんな人に飲んでほしいから」「もしかしたら口に合わないかもしれないから」「ひとのまに来る人たちはみんなカツカツだから」と話す。しかし、「いつもありがとう」と多めにくれる人もいる。また季節限定メニューも販売している。夏にはアフォガードやフロートを、秋ごろには生姜を使って生姜のフレーバーも提供している。いずれも 100~150 円。

今年から毎週木曜に営業日が変わったため、これまでは 300 円だった場所代が月 5000 円の貸切料となった。ただし、ひとのまの正規の貸切料は一回 5000 円である。ユリさんはカフェの営業日を変更する際に宮田さんに場所代のことを相談したが、宮田さんは「好きにやってくれ」とのことだった。正規の貸切料だとユリさんにとっては経済的に負担となってしまいが、「カフェの営業日は週 1 回だけだが、責任を持ってやりたい」というユリさんの意思の元、このようになった。営業日が変わった当初は、材料費さえも賄えていなかったが、現在、材料費は賄えている。

「Café なまけっけ」を宣伝するため、今年からひとのまのシャッター前に看板を立て、ひとのま内にポスターを掲示している。(看板には営業時間と Twitter の ID が書かれている。) 他にも Twitter で営業時間の通知や作ったコーヒーなどを紹介している。(アカウント @Namake_ke) しかしまだ十分な宣伝の効果はないそうだ。

ひとのまの台所の使われ方について比較してみた。木曜日は「Café なまけっけ」があるため、常に台所は調理のために使われている。木曜日は他の曜日と比べ、利用者が少ないので (木曜日はだいたい 5~10 人、他の曜日は 20~30 人ほど)、利用者は会話をしながらユリさんのコーヒーを待ったり、コーヒーを飲んだりすることを居間で行っている。利用者が少数 (2, 3 人) の場合は、全員が台所に集まり、利用者同士またはユリさんを含め、会話を楽しむ場に使われている。その他の曜日は、月曜日だと昼食を作るために台所が使われ、それ以外は人数が増えてきて居間に入れなくなったときに、数人が会話のために使う場所 (居間と利用目的は変わらない) として使われている。また、台所は宮田さんが利

用者の相談を聞くためにも使われていた。

第三項 ひとのまでカフェを開くこと

ユリさんは「さくらカフェ」での「生きづらさを語る会」の参加から、ひとのまでカフェを開くようになった現在までを振り返り、「ここ5年で生活がガラッと変わった。めまぐるしい」と語っている。他にも「当時は生きるだけで精いっぱい、人間関係に悩み、仕事に悩み、人生に悩み、どこにも居場所がなかった」や「ひとのまに来て、人と関わる免疫がついた」という。例えば、苦手な友人との関係に悩んだり、苛立ったりすること、つまり健常者には当たり前に行えることができるようになったことで、「初めて人間らしい生活ができた」と語っている。このように、「生きづらさを語る会」やひとのまで同じ障害を持っている人との出会い、そしてひとのまでカフェを開くことは、ユリさんの生活をおそらく良い方向に変えていったのではないかと考えられる。

<コミュニケーションを取りやすい環境>

ユリさんはカフェでのアルバイトをしていたころのコミュニケーションとひとのまでカフェを開く現在のコミュニケーションを比較して、以下のように語っている。

こういうところ（ひとのま）だったからこそ逆に居やすかったのかなって…。逆にこれまで関わってきた職場の方たちがここに来たら長く居れないだろうなって。ここは空気を読んでしゃべり続けなくてもいいし、多少の沈黙があってもなんか…気まずいとか緊張するとかって誰も思わないだろうし。

これまで、自分はやっぱり沈黙が多い人間だったから、黙っていると緊張するとよく言われたり、一緒にいると疲れると言われることがよくあったので。でも無理してしゃべると変な空気になっちゃったり。やっぱり無理してしゃべっちゃっているのが伝わっちゃって…。それが余計相手には苦痛に思えたり。

ひとのまは沈黙を気にしないので居やすくて。でも職場だとそれ（沈黙）が許されないことが多くて…。今は食堂で働いているけど、仕事の量が多いから（沈黙がなくて）助かっている。やることが多くて、しゃべる間もないのでかえってそれに助けられているというか。

本当はカフェの仕事をしたいけど。実際今働いている食堂でもカフェの部門もあって、カフェの部門を見ていると、スタッフ同士しゃべっている時間が多くて。それを見て、「絶対私はこれができないからカフェの部門は無理だ」と思って。コーヒー作ったりとかデザートを盛りつけるのとかはすごくやりたいんだけど、スタッフ同士の会話がめちゃめちゃ多いなここ〜って(笑)。やっぱりカフェはゆったりしている雰囲気だから、仕事も時

間に追われている感じでもないし。暇な時間がカフェだとどうしてもできてしまうので、暇な時間のおしゃべりタイムがダメで。

このようにユリさんは会話の中の沈黙を苦手としていたため、これまでのアルバイト中のコミュニケーションが上手くいかなかったようだ。しかしひとのまでのコミュニケーションでは沈黙を気にしていないことが分かる。また「ひとのまでは（話すことを）頑張らなくてもいい」と語っている。

また、宮田さんは以下のように発言している。

彼ら（発達障害がある人）がコミュニケーション取れない場って、気を張っている場なんですよね。ちゃんとしなきゃいけないみたい。ここ（ひとのま）で見ると、ちゃんとしなきゃいけないと思っているやつは一人もいない（笑）。（中略）ここではしんどそーにしても大げさに頑張れとも言わないし、邪魔だよとも言わないし。「まあまあそんな時もあるっしょ、おれもそんな時あるし」と。それが健全だなと僕は見ていて。（中村 2016）

宮田さんの発言から、発達障害がある人は会話を義務だと感じず、自然体でいることが、コミュニケーションの運びを良くする方法だと分かる。そして、周りの人も過度な期待をせず、楽観的な態度でいいことが分かる。

ユリさんは、アルバイトをしていたころの人間関係について「自分自身が無く、周りに嫌われるのが怖かった」と語っている。それに対し、現在では、「自分に自信があるので、ひとりに嫌われても全員には嫌われていないという自信がある。誰かに怒ったりしても、周りの人は自分を責めないし自分のことを嫌いにならない。ましてや自分のことを気にしない」と語っている。他にも「自分に自信がないと周りが攻撃したり、周りに見下されたりしたが、ひとのまでは皆、自分のことで精いっぱい良い意味での無関心がある。変わっている人が多く、その人の個性や世界観、考えにその人自身が満たされているから、他人にあれこれいう余裕がない。だから攻撃しない」と語っている。ユリさんがひとのまに来て、自分に自信を持つことができるようになったのは、周囲の人たちの「良い意味での無関心」のおかげなのかもしれない。この「良い意味での無関心」は先述した宮田さんの発言の、「しんどそーにしても大げさに頑張れとも言わないし、邪魔だよとも言わない」に当てはまり、発達障害のある人がコミュニケーションを取りづらい「気を張っている場」をつくらせないようにしているのかもしれない。

<障害に合う環境>

ユリさんは自身の障害について、「みんなでワーワー（騒がしいの意味）すると感情的になり上手くいかない」、「じっとしてしゃべるよりも何か作業をしながらや、手を動かした

がら話す方が楽である」、「長時間話すことが苦手」と話している。また、特別なことに心が追い付かないことや、新しいことを受け入れられないことがあり、普段と違うことにストレスと感ずるため、「特別なことは極力したくない。普段と変わらない感じ」を求めている。

ユリさんがひとのまでカフェを開くことができている背景には、自身のハンデをうまくカバーできているからではないかと考えられる。以下はユリさんの語りである。

(1) あまり（職場が）広すぎると…自分の容量が追い付かなくなる。台所の質感というか、なんか落ち着く。

(2) やっぱ、人と話すの好きな方だけどなんか手ぶらだと話しにくくて。なんか作業している方が話しやすかったり。多分作業するものなしにひとのまに来たら、自分は長く居れないと思う。

(3) ひとのまのうるさいところ（居間）は、私には限界で。ちょっと離れたところ（台所）なら。作業をしながらなら苦にならない。仕事がない状態だと、もううわーって。それもあって、毎週水曜日にも限界感じてきて、で、木曜日に。

(1) の語りからは、ひとのまの台所がユリさんにとってちょうどよい広さであること。(2) の語りからは、コーヒーを作るという作業をしながらコミュニケーションをとることができていること。(3) の語りからは、10人以上が居座るひとのまの居間よりも、多くても5,6人程度しか入ることのできないひとのまの台所であるからこそ、ユリさんにとって、うるさすぎない環境であり、ひとのまという一軒家の台所は、普段から趣味でコーヒーを淹れているユリさんにとって「普段と変わらない感じ」でコーヒーを淹れることができる環境にある可能性がある。

また、ユリさんは機械を触るのが苦手アルバイトをしていた当時はコーヒーの機械を壊してしまったことがあったため、機械を使うことに苦手意識を持っていたそうだが、「Café なまけつけ」ではコーヒー豆を挽くための機械を使い始め、今となっては使いこなしている。またアルバイトのころは、デザート盛り付けを担当していたそうだが、今はコーヒーを淹れ、ラテアートも作ることができている。ユリさんには自身の障害上、特別なことを受け入れられないというハンデがあったが、ひとのまでカフェを開いてから、機械を使うことやコーヒーを淹れることという新しいことに挑戦できている。

以上より、ひとのまの台所でカフェを開くことは、ユリさんの障害をカバーしながらもカフェを開くことのできる環境、自身の苦手を克服できる環境である可能性がある。

<自分のカフェを持つ責任感>

ユリさんは自分のカフェを運営することに対して責任感を感じていることが分かった。以下はユリさんの語りである。

ユリ：貸切にした分、自分の好きなようにさせてくださいって。(ポスター、看板など)
宮田さんはそこを「あーいいよ、いいんじゃない」って。なんの気にも留めず。やれば？
みたいな感じで。ポスターを貼った時も他のお客さんが「こういうことされる方もいら
っしゃるんですか？」と聞かれたときに宮田さんは「いや、俺知らないんだよ。」って(笑)
「あいつが勝手にやっているだけ」って(笑)。

高屋：勝手にOKを出してくれることがやりやすさにつながる…

ユリ：かもしれない。でも勝手にやっている分、責任はその裏返しで何かあっても責任
は大方自分でとれよって感じなのかなって。(中略)

ひとのまの雰囲気って、なんかあっても宮田さんって積極的にもものに入らないじゃない
ですか。(女性：うんうん。)基本当人同士で解決みたいな。よっぽど大ごとになってき
たら入ってきたりとか、宮田さんお願いしますって感じで泣きつかれたら、まあしゃあ
ないなあって、話は聞いてやろうって。なんでもOKな代わりに自分たちで解決みたい
な。

ひとのまの“支援”スタイルの特徴として「困りごとは必ずしも解決する必要性はない」
点が挙げられ、宮田さんの問題を無理に解決しない、物事に深く干渉しないという特徴が
あった。そのことが逆にユリさんが自分のカフェを自分の手で作り出していく責任感につ
ながっていることが分かる。このことについてユリさんは「自分で責任を持つと注意深く
なるし。かえってしっかりするのかもしれない」とも語っている。

<苦手な人への対応の変化>

カフェでアルバイトをしていたころのユリさんは、人間関係で悩むことがあっても一人
で悩み、抱え込んでいた。しかし現在はひとのまで人間関係で悩むことがあっても上手く
対処できるようになったと感じている。以下はユリさんの語りである。

ユリ：去年いた人で私もう関わっていない人なんですけど、ちょっとここにおられたら
きついなーって思ったら、「ちょっと二階の部屋とか違う部屋に行ってもらってもいいで
すか」って言って、(二階へ)行ってもらったりとか。基本、毅然と言えば出てってもら
えるので。でも、それ言った後、家帰ってから疲れて…(笑)自分も注意したりするのが、
好きじゃないというか苦手だし。基本誰かの注意はしたくないというか。でも、せざる
を得ないこともあるんやなって学んで。

高屋：アルバイトをしていたころ、人間関係でうまくいかなかったときの対処の仕方と、
ここでの対処の仕方って違いますか？

ユリ：カフェで働いていたころは対処ができなくて、やっぱり自分で受け止めて抱え込
むしかできなかったから、何もできないまま体を壊すばかりで。介護の仕事していた

ころも基本まだそんな感じで…。こう、自分で受け止めて抱えるばかりで。相手にこう毅然と言えることもできないばかりで…。なまけっけやったばかりのころも、変な人が来て、浸食というか「一緒にやりたい」って言って…（高屋：コーヒーを作ることですか？）うん。「私お菓子出すから」とか言って。またそこで人間関係が難しくなりかけたこととかもあって。その人にも今は毅然と言えるようになって。相手には申し訳ないけど、自分の心も埋まらなきゃいけないなって思って。一番大きいのは、自分の心も守るのも必要だなって。

まあ、これも週に一回、短い時間でやっているだけだけど、自分の中で責任も生まれて、簡単に体調を壊しただけで終わらせたくないなって思って。だからこういう（自分を守る）ことも必要かなって。

このように、以前は人間関係で悩むことがあっても、苦手な相手への働きかけはなかったユリさんだが、ひとのまでは、自身の身を削るような思いをしてでも、自分の意思を伝えることができるようになってきているようだ。それほどユリさんにとって、このカフェの存在は大切なものとなっているのではないか。その背景には、先述した「自分のカフェを持つ責任感」がそのような対応をするよう奮起させたのかもしれない。

以上より、ユリさんにとってひとのまは、コミュニケーションをとりやすい環境、自身の障害に合っている環境であるとともに、自身のカフェを開くことで責任感を持つことができ、さらには苦手な人へも対応できるようになったことで、人間的にも成長できる場である可能性がある。

第四項 新しい職場

ユリさんの働く食堂のパートには、障害者枠はないが、ユリさんは自身の障害のことを店長と正社員の人には話しており、障害を容認した上で雇ってもらっている。そして、ユリさんは食堂で働き始めたころ、周りのスタッフたちに障害については話していなかったが、ユリさんが体調不良で周りの人に迷惑をかけた際に食堂部門の先輩の「おばちゃん」3人に自分の障害について打ち明けた。食堂部門には、その「おばちゃん」3人以外にも2人働いている。しかし、ユリさんは一部の人に障害を打ち明けたが、周りの人には障害者だからといって特別な扱いをされているわけではない。ユリさん自身、特別扱いされるのが嫌であり、勤務中は忙しいのでそのように扱っている暇もないそうだ。

食堂はご主人の知り合いが何人か働いており、そのご主人のツテでユリさんは食堂で働き始めることになったそうだ。食堂は食堂部門と喫茶部門に分かれおり、ユリさんは働き始める際、どちらで働くかを選ぶことができた。ユリさんは勤務中のおしゃべりや同世代とのコミュニケーションが苦手である。そこで、食堂部門は常に作業があり、喫茶部門よ

りは会話をしなくていい点、ユリさんと同年代の人たちは喫茶部門で働いている点を考慮して、食堂部門を自ら選択した。また、喫茶部門の人は食堂部門が忙しくなると応援に行かなければならず、そのこともあって食堂を選んだようだ。また、ユリさんが以前カフェでアルバイトをしていたころのレクリエーションは強制参加だったようで、ユリさんは参加することを苦痛に感じていたようだ。しかし、現在のパートのレクリエーションは任意参加であるため、ユリさんは行かないようにしているようだ。

食堂部門で働くユリさんのコミュニケーション・スタイルは、以前と変化しているように感じられた。以前、カフェでアルバイトをしていたころのユリさんは、会話の中の沈黙を苦手とし、「空気を読んでしゃべり続けなければならない」と会話をすることに義務感を抱いていた。しかし、パートの休憩時には、ユリさんはおばちゃんたちとの会話に無理に参加せず、うなづくことでコミュニケーションをとっているようだ。ユリさんは「同世代じゃないので（会話に参加しなくて）いいやーってなる」と語っている。また、作業中もユリさんは話しかけられたら話すスタイルでコミュニケーションをとっているが、「黙々と作業していると良い目で見られず、自分は避けているつもりはないけど避けられていると思われてしまう」と感じていることから、自分のコミュニケーションについて多少は不安に思っていることが分かった。

以上のことから、ユリさんが食堂で働き続けることができている要因を考察する。

まずユリさん自身の努力として、障害をオープンにしていることが挙げられる。そしてこのことを周りの人たちは受け入れているが、ユリさんを障害者だからといって特別に扱うことはしていない。このことは、ユリさんの望んでいる結果だったため、障害をオープンにすることは、ユリさんが食堂で働き続けることのできているひとつのきっかけになったのかもしれない。そしてユリさんは、業務中や休憩中の「おばちゃん」との会話を無理に参加しようとはしていなかった。これも障害をオープンにしたことで、「おばちゃんは私の障害を知っている」という安心感や信頼感からそのような行動をとれるのかもしれない。逆に、「おばちゃん」たちもユリさんの障害を分かった上で、無理に会話に参加させないという配慮を行っていることも推測できる。またユリさんの働く食堂部門は、ユリさんが苦手な同年代の人がいないことやレクリエーションが任意参加であることから、ユリさんがストレスだと感じる事が以前のカフェでのアルバイトや介護の現場よりも少ないため、働きやすい環境になっていることも推測できる。

障害をオープンにしたことや、無理に会話に参加しないことはユリさん自身の努力であり、障害を容認しつつも、障害者だからといって特別扱いしないことは周りの配慮・理解である。また、ユリさんは食堂の二号店の店長をなまけっけに招き、コーヒーでもてなしたことがある。食堂が忙しくなった時に二号店から応援に来てくれるため、一緒に現場で働いたこともある。ユリさんはその人について「精神的に助けられた」と語っているため、そのような人の存在も、ユリさんのパート勤務の支えになっているのではないか。このように、ユリさんの障害や苦手意識に合った環境であることが、ユリさんが食堂でのパート

勤務を比較的長く続けることができている要因ではないかと考えられる。

第五項 ユリさんにとってのひとのま

本節でも、第二章第四項の 3 つの着眼点をもとに、ユリさんにとってのひとのまの「居場所」観を分析する。

まず、「居場所」という時空間の必要性について述べる。関谷（2007）は、社会からの疎外感などの不安の多い、精神障害者には“場”自体が必要であり、周囲の目から逃れられることを指摘した。つまり、精神障害者にとって「居場所」は、シェルターの役割を果たすのではないかと考えられる。ユリさんは、「さくらカフェ」での「生きづらさを語る会」に参加し、ひとのまでカフェを開くまでを「どこにも居場所がなかった」と振り返っていることから、ユリさんにとって、「生きづらさを語る会」や「ひとのま居酒屋」は、当時行き場のなかったユリさんにとってのシェルターとして機能していたのではないかと考えられる。

そして、佐川（2009）は、「居場所」のフレキシブルさが、当事者にとっての落ち着きや安心といった感情につながっていることを指摘した。このことに、ユリさんがひとのまでカフェを開くことを照らし合わせると、ひとのまの台所は、空間のフレキシブルさを持ち合わせており、ユリさんは自分が作業しやすいように、そのフレキシブルさをうまく活用していることが考えられた。

まず、ユリさんは自身のハンデとうまく向き合うために、ひとのまでカフェを開くことに対し、「普段と変わらない感じ」を求めている。この「普段と変わらない感じ」とは、ユリさんがカフェを開いているひとのまの台所が、一軒家の台所であるため、自宅でも趣味としてコーヒーを淹れているユリさんにとって、理想の場なのかもしれない。これには、ユリさんはカフェを開くうえで、道具やマグカップなどはすべて、私物を持ち込んでいることも関係しているだろう。また、アルバイト時代に機械を壊してしまったため、機械に対し苦手意識を持っていたが、その苦手意識も克服でき、ラテアートや季節限定のメニューを考案するなど、新しいことに挑戦することへもつながっている。そして、ユリさんは、ひとのまの台所の質感を「落ち着く」と語っており、台所の広さについても、作業のしやすい、ちょうどよい広さであると感じている。このように、ひとのまの台所は「普段と変わらない感じ」を求めているユリさんにとって、自由にカスタマイズできるフレキシブルさや、日常の延長のように感じることでできる質感や広さという点から、融通の利く、理想の空間となっている可能性がある。

また、ユリさんは、コミュニケーションや人の多すぎる空間についても苦手と感じていた。そのため、ユリさんはひとのまの利用者の多さを理由に、2018 年からは、営業日を変更した。このことは、ひとのまの毎日のスケジュールが特に決まっていないという時間のフレキシブルさがあったからこそ、出来たことであると考えられる。そして、ひとのまで

お客さんがコーヒーを楽しむ空間は、台所だけと決まっているわけではないため、ユリさんが働きやすいように、お客さんに居間へ移動してもらうことも可能であった。しかし、そもそも台所は、お客さんが4~5人ほどしか入れない狭い空間であるため、ユリさんが苦痛と感じるほどの人数は、物理的に入ることのできないスペースである。このように、ひとのまの台所の空間は、ユリさんの苦手意識に合っていると考えられる。そのため、佐川（2009）の指摘するように、ひとのまの台所という「居場所」の柔軟な時空間の構成が、ユリさんに「落ち着き」や「安心」といった感情を生み出しており、ユリさん自身、作業中はお客さんと必ずしもコミュニケーションをとらなくてもよいと、心にゆとりを持つことにつながっている可能性がある。

次に、ユリさんは、ひとのまやカフェを「居場所」として、どのように意味づけているのか。まず住田（2004）は、自分と同じような立場や境遇にいる他者の存在が、安心感やリラックス感を持つことにつながり、また、居場所のなかで、自己受容と他者受容を経験し、この受容的態度が居場所の神髄だとしている。住田（2004）のいう、「自分と同じような立場や境遇の他者の存在」というのは、ユリさんにとっては、「生きづらさを語る会」や「ひとのま居酒屋」で出会うこととなった他者の存在であると考えられる。ユリさんは「生きづらさを語る会」に参加したことについて、「自分と同じ境遇の人がいたことに、気分が高揚し、感動と安心で泣いた」と語っていることから、安心感を感じており、また、「ひとのま居酒屋」についても、「居心地がいい」や「空間を楽しんでいた」と語っていることから、ともに、安心感やリラックス感を感じることができる空間であったことが考えられる。そして、「生きづらさを語る会」でユリさんは、「初めて友人ができた」と語っており、ひとのまに来ることで、「初めて人間らしい生活ができた」と振り返っていることから、どちらの出来事からも、他者との関係性を構築し、他者受容を感じることもなった可能性がある。また、関谷（2007）は、その人の人生の転機となり、その後の過程を支えていく力となった要因に、その人を温かく受け入れてくれる「居場所」の存在を挙げている。ユリさんを例にとると、「生きづらさを語る会」や「ひとのま居酒屋」に参加したことがきっかけとなり、同じ境遇の人との出会いや、初めて友人ができ、受容感や安心感を感じることができたため、ユリさんにとって、「生きづらさを語る会」や「ひとのま居酒屋」は、「居場所」ととらえることができ、ユリさんにとって人生の転機となった可能性がある。

また、カフェを開くことに対し、宮田さんからの直接的な支援はないが、軽く許可を出してくれたことが、ユリさんにとってカフェをやりやすいと感じる要因になっており、宮田さんに信用されているからこそ、ユリさんは自分のカフェを持つ責任感を感じていた。このように、相手に信用、尊重されていることから生まれる受容感、ユリさんに責任感、そして、自己肯定感を高めることにつながっていった。このことは、木下（2018）の、「居場所」とは、他者から尊重され自分を発揮できる場所であり、自分らしく貢献できている思いや社会的役割を果たしているという思いが心の拠り所になっているという指摘につながっていると考えられた。

このように、ユリさんにとって、「生きづらさを語る会」と「ひとのま居酒屋」での、自分と同じ境遇の他者との出会いは、他者からの受容感や安心感を感じることで、それらを「居場所」だと感じる事ができた可能性がある。また、ひとのまでカフェを開くことが、ユリさんの自分を発揮できる「居場所」とすることができ、自己肯定感を高めることにつながっている可能性もある。

ユリさんは、カフェを開くまでの経験で得ることのできた「居場所」観を、現在カフェと並行して働いている、パート勤務に応用できていることもうかがえた。まず、自己肯定感を高めることや、周りに受容されていると自信がついたことで、パート先の一部の理解者に、自身の障害について打ち明けるきっかけとなったのではないかと推測する。また、ユリさんは、コミュニケーション中の沈黙を苦手としていたが、現在は、無理に会話に参加しなくてもよいと考えるようになっている。このことも、自己受容感や自己肯定感が高まった結果であるのかもしれない。

以上より、ユリさんがひとのまでカフェを開くことが、就労の前駆的形態であるとする、木下（2018）の精神障害者が自己の役割を確立するためには、自己の存在価値、自己肯定感を高め、社会復帰を目指していくための手段として、就労が考えられるという指摘に、このユリさんの例は合致するように考えられた。ユリさんは「生きづらさを語る会」や「ひとのま居酒屋」で受容感や安心感を体験したことが、人生の転機となり、ひとのまでカフェを開くという夢を実現することに至った。カフェを開くことで、受容感だけでなく、責任感や自己肯定感も感じるようになり、自身の障害と向き合いながら、苦手なことを克服しつつも、現在のパートでこれまでの経験を活かし、社会復帰を実現できている。これらより、就労と「居場所」にも相互に関係性があるといつてよさそうだ。

第三節 タカさんについて

第一項 基本情報

タカさんは今年 60 歳になる。2017 年 8 月まではスーパーで勤務しているサラリーマンだったが、上司との人間関係で鬱になり、12 月の暮れまで車中泊で生活をしていた。自殺を考え、最後に誰かに話を聞いてほしいと思い、市役所の社会福祉課に遺書を持って相談に行くと、ハローワークを紹介され、その後ひとのまを紹介されたという。

今年の 6 月までは、ひとのまの 2 階で主に独りでテレビを見て生活しており、暇なときは近所を散歩したり、木曜はユリさんに働いていたころの愚痴を聞いてもらったりなどしていたそうだ。ひとのままで生活していた当時は、ハローワークで雇ってもらえるところを探していたが、住居も身寄りもないタカさんを雇ってくれるところはなかったそうだ。タカさんは「宮田さんに迷惑をかけられない」や「ここはあくまでコミュニティハウスだから、みんなの場所だから」「でも宮田さんにこんなこと言ったら心配されるし、置手紙でもしていなくなるつもり」と話していた。

ユリさんによると、その後タカさんは、周りの人に「7 月まではいる」と話していたが、2018 年 6 月中旬になるとひとのまを出ていき、昼間は公園で過ごし、夜は高速道路インターチェンジの近くの駐車場で、車中泊をして生活していた。7 月中旬になると、宮田さんはタカさんの居場所をつかみ、週 1, 2 回食料を届けたりお金を貸したりしていた。宮田さんは車中泊をしているタカさんに「いつでも戻ってきていい」と話している。タカさん自身、ひとのまに戻ってくることや、生活保護を受け生活を立て直すこと、もう一度働くことなどの選択肢はあったが、宮田さんいわく、タカさんは「やりたくないことやっても残りの人生それでいいのか」という気になっていったそうだ。

その後は、市役所の職員に入所施設を紹介され、一度ひとのままでタカさん、宮田さん、市役所職員で入所するかどうかの話し合いをした後、7 月下旬からそこで生活をしている。

第二項 宮田さんの見解

宮田さんは、タカさんがひとのまに来た時に、「しばらくここにいたら？（ひとのまにいることに）期限なんてなくていいんだよ。寂しいって思うんだったら寂しくなくなるまでいればいいじゃん」と話したそうだ。タカさんに働くことや自立することを強要せず、“寂しくなくなることを”を第一に考えていることが分かる。そして宮田さんは、ひとのまに来たタカさんに、生活保護受給を勧めたりハローワークに行かせたりなど、専門的な施設を紹介するのではなく、“一緒に”仕事を探すといった方法を提案し、無理に問題を解決させようとはしていないことが分かった。このことは第四章ひとのまの“支援”スタイルのひとつの「困りごとは必ずしも解決する必要はない」につながる。以下は宮田さんの語りである。

生活を立て直したいって思うんだったら、生活保護みたいなやり直しの仕方もあるし、仕事を探すっていうんだったら、ここから探せばいいし、んでどうしても見つからなくて一緒になって探してほしいんだったら声かけてって、一緒に探すからみたいな感じのことを言っていたかな。

結局俺がね、タカさん見て、半年居て、いろいろ思ったことなんだけど、元からの性格が鬱だからなのか分からないけれども、自分で判断するっていうことが極端にできない人だなって思ったの。そういう人って結構多くって。しかも孤独な人ってそういう人が多くって。んで、結局ここに住むことになりました。で、口ではみんないいこと言うんだよ。「お世話になります」「ありがとうございます」って。でも、いつの間にか閉じこもっちゃうのね。タカさんもそうだったし。んで、こっちの方からちょいちょい声かけたりするんだけど、なんかそれも「わかりました、わかりました」みたいな。そんな感じになりたくないから、ってそういうのもタカさんにもあって。そういうときに「いやいや、そう言わずに」ってグイグイいったらどうなるかってのも俺は分かっているから。グイグイ行ったらすぐどっか行っちゃうから。まあまあそれでよかったらそれでいいっすよ、って感じで付き合っていくんだけれども。

宮田さんいわく、孤独な人は自分で判断することが苦手で、他人に干渉されたくないという人が多く、そのような人に物事を積極的に勧めても離れていってしまうようだ。そして干渉されすぎると、彼らは「みんなのコミュニティハウスなのに…」という言い訳をしてしまうと宮田さんは考えている。

そのため宮田さんは「好きにしたら？」という結論に至る。干渉されなくなかったら全然いいよって言う。それで先に進めるんだったら」と語っている。このことも「困りごとは必ずしも解決する必要はない」にも関係しているのかもしれない。

俺が口で言っていることと実際やっていることは結構違って。よそでは俺はもう知らんがな、俺、人のことなんか知らんよとか、助けてって言われないとわかんないよとかね、よく言うんだけど。でもなんかね、「いや助けますよ私が」っていう人よりも、たぶん助けているし、たぶん手も出している。でもなんであえて、いや俺はそんなことやりたくないし、しないんだ、って言うかという、なんか、結局なんでも助けてくれる宮田さんがいるからやれてるんだ、って思われたくなくて。だからあえて不自然なくらい、いやいや俺、何もせんしって言っているし、自分でもそう振舞おうとも思っている。

一方で、宮田さんの「好きにしたら？」という放任主義的な考え方の背景には、「結局何も助けてくれる宮田さん」にはなりたくないという考えがあることが分かった。

しかし、今回タカさんがひとのまから出て行った際、宮田さんは物資を届けたりお金を

貸したりした。このことについて、宮田さんはタカさんにもしものことがあった時に一番後悔するのは自分であると思っているため、最終手段として行動に出たそうだ。「(自分が) こんだけやって (タカさんに) 死なれたら、もうしゃあないやろって言えるぐらいのことはやっておきたい」と語っている。

今回タカさんがひとのまに住んでいたころ、数人の利用者がタカさんのことを気にかけて「大丈夫？」など声をかけていた。そのことが、かえってタカさんをひとのまに居づらくさせ、自分を責める原因になっていた可能性もある。宮田さんはこのことを心配していた人たちに分かってほしいと考えており、以下のように語っている。

なんとかしてあげなきゃって、それで一緒に行動も伴ってくれれば、俺も言うことは何もないんやけど。心配だけして、でも自分は行動に移さなくて。じゃあ、そうなるって心配されている人はどうなるのか。それを一個ずつ真に受けて、それについていろんなことを思って、心配されているから、ちゃんとした答えを返さなくちゃいけないとかなったりして、俺はどんどんこじれていくと思っているから。そう思うんだったら、いろいろ動いてみて、いろいろ見てみたらいいのに。タカさんと一緒に動いてみたらいいのにな。そしたら、タカさんはこういうこと思っていて、こういう風に思っていて、口ではこう言っても、こういうことになるんだなってやつを、ちゃんと見たらいいのになって思う。

このことから宮田さんは相手を心配するだけでなく、一緒に行動し、相手の行動や心理を理解することも大事にしていることが分かる。宮田さんは「真実は頭の中にはないよっていつも思っていて。目の前にしかないんだから」と語っている。このように“一緒に”行動し、相手の考えていることを理解しようとする宮田さんの考えは、ひとのまの“支援”スタイルの「支援する・されるの区別がない」と関連するのかもしれない。

第三項 ユリさんの見解

タカさんがひとのままで生活をしていたころ、タカさんは前の職場で嫌だったこと（上司からの嫌がらせなど）やその職場を辞めざるを得なかった経緯などをユリさんに話していた。ユリさんはタカさんの話を聞くだけで、「大変だな」や「理不尽だな」と思っていたそうだ。ユリさんも、生活保護に明るい知り合いにタカさんのことを相談し、解決策を模索している段階だったが、行動を起こさせたり専門家を紹介したりしても、タカさんは乗り気ではなかったようだ。

ユリさんに「タカさんは能動的に何かした・したかったことはあるか」と尋ねたところ、「ないね(笑)」と答えた。周囲が何か提案してもタカさんは「気持ちはあるけど体が動かない」と言っていたそうだ。タカさんはひとのまに来る以前、市役所とハローワークとの間でたらいまわしにあっていたそうで、そのことがトラウマになっているのではないかと、

自分で動くことが怖いという鬱の特徴が関係しているのではないかとユリさんは推測している。

タカさんがひとのまを出ていき車中泊に戻ったころ、ユリさんは2度、タカさんの元へ見舞いに行った。1度目はタカさんがひとのまを出て行ってから一か月後ごろで、ユリさんは一か月ぶりの再会を意気込み、一念発起して、苦手な長距離運転をして向かった。タカさんは日焼けをし、頬がこけていたようだ。ユリさんいわく、タカさんは、市役所の人が見えに来てくれるが、そのことが限界（おそらく重荷）と語り、今の自分に気力も体力もなく、コロッと死ねたら、とマイナスな話ばかりをしていたようだ。その時にユリさんは、タカさんに入所施設に行くかもしれないと告げられたが、ユリさんは「タカさんはそこ（入所施設）しか行くところがないから、そのような選択をしたのではないかと話している。2度目の見舞いは、それから一週間後で、その翌日にタカさんは施設に入所することとなった。ユリさんはタカさんの見舞いに行った時のことについて、「タカさんはマイナスな話しかしない」や「ネガティブな人だな、でも命はつなげているからいっか」と振り返った。

宮田さんは、タカさんがひとのまに住んでいたところに、他の利用者が「大丈夫？」など声をかけていたことが、逆にタカさんをひとのまに居づらくさせ、自分を責める原因のひとつになっていたことと語っていた。そのことを筆者が7月中旬にユリさんに伝えた際は、「みんな何もしていないというわけではなく、知り合いのつてなどを頼り、就労先を探していた矢先にタカさんは出て行った」と少し反発的だった。ユリさん自身、知り合いのホームレス支援を専門としている人に連絡をとり、支援計画書を完成させ、タカさんに見せようとする段階まで来ていたが、タカさんはひとのまを出て行ってしまったようだ。しかし、9月後半に筆者が中間報告書のレジメをユリさんに見てもらった際、ユリさんは「(自分がタカさんに) 介入しすぎたせいで入所施設行きを早めたのではないかと少し不安そうだった。

第四項 タカさんにとってのひとのま

タカさんは、2017年の暮れから約半年間、ひとのまで生活していた。それまでは、車中泊をしていたタカさんにとって、ひとのまは、関谷（2007）のいう「自分の身を置ける物理的な場」として、一時的には、タカさんにとっての物理的な「居場所」となっていたと考えられる。タカさんは、他者とかかわらないようにするために、ひとのまの2階で過ごすことが多かった。ひとのまの2階は、1階の居間と比べ、普段から使われることが少ない。そのため、タカさんのように、他人からあまり干渉されたくない人にとって、2階は人と距離を置くことのできる場としても機能できる。このことは、「居場所」の環境は、その時々で即興的に構築されるものであり、支援者と利用者の相互のやり取り（ここでは、利用者同士のやり取り）の中で、フレキシブルに生み出されるものであるという、佐川（2009）

の指摘に似ているように感じた。そのため、タカさんにとってひとのまの2階は、他者からの逃げ場として柔軟に機能していたのかもしれない。

とはいえ、関谷（2007）が指摘するように、物理的な場に一緒にいるということで、おのずと他者とのやりとりが生じる。ひとのまで、他者とかかわることを苦手としていたタカさんにとって、このことが、ひとのまを「居場所」とできなかつたひとつの要因なのかもしれない。タカさんが、ひとのまで他者とかかわらないようにしていたとしても、ひとのまがコミュニティハウスである以上、他者の行動や会話が、自然と目や耳に入ってくることもある。そのため、タカさんがひとのまで生活しているだけでも、関谷（2007）の指摘する、物理的な「居場所」が他者とのかかわりの基盤となり、他者と比較することで、自分の社会の中での位置を考えさせられたり、周囲への面目を保てなくなったりということが、タカさんの中で無意識に起こっていたのではないかと考えられる。このため、タカさんにとってひとのまは、物理的には「居場所」として成立しながらも、精神的には「居場所」となることが難しかったのかもしれない。

その後、タカさんはひとのまを出ていき、車中泊に戻ってしまった。それでもひとのまの人達との出会い、宮田さんがお金を貸したり物資を届けたりしたこと、市役所職員と入所施設へ行くという決断をしたことは、ひとのまで生活したからこそできたことである。宮田さんやユリさんが考える最善の場でなかったが、タカさんが生活基盤を整えることをある意味達成できたのかもしれない。そのため、ひとのまはタカさんの人生の中での“通過点”として機能していたのではないかと考えている。このように、ひとのまがタカさんにとっての“通過点”にとらえることで、タカさんは一時的だが、ひとのまに受容的だったのではないのかのかもしれない。タカさんはひとのまに住んでいたころ、ハローワークに行くことで自立へ向かおうとしていた時期があった。また宮田さんも、一緒に仕事を探すことを提案したり、ユリさんも生活保護を申請するための計画書を作成したりなど、タカさんは、彼らと一緒に、自立に向かおうとしていた時期があった。このことは、タカさんが、自分を受け入れ、生活を立て直そうとする自己受容的な態度をとり、自己を肯定しようとしていた可能性を示している。また、タカさんが車中泊に戻った際、宮田さんやユリさんが見舞いに行ったことは、タカさんにとって、他者からの受容や尊重を感じる場面であった可能性もある。このように、タカさんは、ひとのまを長期的に「居場所」とできなくとも、「居場所」を構成する要素にふれることはできた。

また、ひとのまは就労を支援する場ではないが、間接的に自立（就労）を仕向ける場である可能性があるように思えた。ひとのまを“分岐点”として自立に向かおうとする利用者が多いため、ひとのまの利用者の年齢層が高い木曜日は、自身のアルバイトの話や、病院での治療の経過や、快方の向けて始めようとしているクラブの話が話題になっていることが多いと感じた。タカさんは特に木曜日に1階に降りていたため、このような自立に向けての社会参加や、障害や病気が快方へ向かっていることなどの明るい話題は、間接的にタカさんに自立を強制するよう仕向けていたのかもしれない。そのため、タカさんにとっ

て居づらい場であったのかもしれないが、ひとのまは、タカさんの自立をサポートしていた場ともとらえることができる。先にも述べたように、タカさんなりの自立とも考えられる、施設へ入所することの話し合いは、ひとのまで行われ、そして何よりも、ひとのまを出て行った後にも、宮田さんやユリさんの見舞いは、ひとのまを出てでも、タカさんの行く先をゆっくりと見守っていた可能性がある。このため、「居場所」と就労（タカさんの場合は自立）の関連性は大きいあると考えられる。このことは、三橋（2009）の、就労（自立）支援、生活支援の充実が、「居場所」の役割であるという考えに当てはまるのではないかと考えられる。

このように、ひとのまの利用者の多くは、ひとのまを“分岐点”として、生活を立て直そうとしている。しかし、タカさんの場合は、それが難しかったのではないかと筆者は感じている。タカさんのように、能動性が弱い人がひとのままで生活することは、就労や生活基盤を整えるといった本人の目標につながらないため、逆にひとのまに居づらくなっていたのではないかと推測する。そのため周りからの「大丈夫？」と心配するなどの積極的な介入はタカさんを知らず知らずのうちに圧迫していたのではないか。タカさんの現状を「大丈夫？」と心配することは、選択肢を狭めたり結論を急いだり、次の行動をせかしたりすることにもつながっているように思える。むしろ、物事に対して「よい方向に向かっていく」とか、逆に「今のままでは問題だ」などと白黒はっきりと判断しないことが、ひとのまに長くいるコツなのかもしれない。そしてこのことは、第四章ひとのまの“支援”スタイルのひとつである「困りごとは必ずしも解決する必要はない」にも関係しているように思われる。

第六章 考察

第一節 先行研究再訪

本研究の着眼点として、第二章第四節で、以下の3つを挙げた。

- 1) 物理的な「居場所」という時空間の必要性。
- 2) 「居場所」を意味づける重要な要素を、その「居場所」の利用者はどのように感じているのかが重要であること。
- 3) 自己肯定感や自己存在価値を高める手段として、就労が考えられ、就労は「居場所」と関連性があること。

これらを再度、事例を横断しながら考察する。まず、この節では1)と2)について論じる。

初めに、ひとのまは各利用者にとって、物理的な「居場所」として機能していたのかを考察する。ユキちゃんは、ひとのまに来る以前、複数の就職支援機関にたらいまわしにされていた。しかし、ひとのまは、障害の有無や年齢、その人の経歴にかかわらず、「誰でも来ていい」というスタンスをとっている。そのため、ユキちゃんのように、制度と制度の谷間にいる人にとっての受け皿として機能していた。また、ユキちゃんは最初、高校卒業の資格を得るために、ひとのまに通っていた。ユキちゃんにとって、ひとのまに通うことは、学生という身分になりえる行動と考えることができる。そのため、関谷(2007)の「居場所」があることで、「自分にも周囲にも面目を保てる」といった機能をユキちゃんは感じていた可能性もある。

ユリさんは、対人関係や自身の障害に悩んでいたが、「生きづらさを語る会」や「ひとのま居酒屋」に参加することで、自分と同じ境遇にある人と出会えることができた。そしてユキさんにとって、他者とのつながりを持つきっかけとなり、安心を感じることでできた場となった。このことは、関谷(2007)の「居場所」を持つことが、自己存在を保つことや、他者との関係性をもつことに役立つといった指摘に合う。

しかし、「居場所」が他者との関係性を持つきっかけをつくる時空間でもあるということが、タカさんのように、人とかかわることを億劫に感じたり、自分と他人を比較して、自己肯定感を感じることに難しくなってしまうことにつながった部分もこの調査を通して見受けられた。とはいえ、タカさんにとってひとのまは、関谷(2007)の「自分の身を置ける場」として、一時的ではあるが、物理的な「居場所」として機能していたことも見逃せない。

また佐川(2009)は、「居場所」の時空間のフレキシブルさが、その利用者にとって、安心や落ち着きといった感情を生み出す要因になっていることを指摘した。本研究を通して、ひとのまの時空間の様々なフレキシブルさを見つけることができた。ひとのまでは、一日のスケジュールは存在しないという、時間のフレキシブルさ、そして、「誰でも来ていい」

というスタンスから、老若男女、障害の有無を問わず、みんなの「居場所」であるという空間のフレキシブルさも考えられた。そして、みんなの「居場所」だからこそ起こり得る、人間関係のわずらわしさを、ユリさんやタカさんは空間を変えることで回避していた可能性も指摘できた。また、ユキちゃんは学習上でのマンツーマン志向、ユリさんは、コミュニケーションや人間関係などの苦手意識など、障害がありながらも、ひとのまの時空間のフレキシブルさを活かして、彼女らは、ひとのまを「居場所」としていた。そして何よりも、ひとのまは、その対象者にとって、学校にもなりえるし、直接的ではないが、就労支援施設にもなりえる。このようなひとのま自体のフレキシブルさは、利用者を限定せずに、みんなの「居場所」として機能しているための、最重要要素であると考えられる。そして、このフレキシブルさをつくっているのが、宮田さんの、その人の力量にかかわらず「とりあえずやってみる」という精神なのではないか、と考える。この精神は、ひとのまの“支援”スタイルの「相談された困りごとは、必ずしも解決する必要はない」に近く、ユキちゃんの高卒卒業の認定取得、ユリさんのひとのまでのカフェ開業、タカさんが一時的ではあるが、ひとのまに身を寄せたことは、宮田さんが「とりあえず」下した決断の結果であるのかもしれない。

次に、利用者が「居場所」を意味づける要素について、筆者は、受容感その基礎となる要素なのではないかと考えている。ユキちゃんは、ひとのままで役割を担うことで、自分が周囲の役に立つ存在であると自己受容でき、役割を果たすことで、他者から認められていると、他者受容も感じる事ができている点を指摘した。ユキちゃんのマッサージ師になる夢を周囲の人は応援してくれていることも、受容感につながっている可能性が考えられた。ユリさんは、「生きづらさを語る会」や「ひとのま居酒屋」で、同じ境遇にある他者に出会うことで、安心感やその場を楽しむことができ、その場に自分が受け入れられているという、受容感を感じていた可能性がある。さらに、ユリさんはひとのままでカフェを開くことでも、他者からの受容感や自己肯定感を高めることができた。タカさんについては、ひとのまを出て行った後、ひとのまという物理的な「居場所」がなくても、宮田さんやユリさんの見舞いから、他者受容を感じる事ができた可能性がある。

また住田（2004）は、受容感を感じるために「同じような立場・境遇」の他者が、「問題を共有」し、「互いに同調的な理解や支持」を示すことを述べている。ユリさんの「生きづらさを語る会」での参加者は、確かに同じ境遇の他者といえるが、ひとのまの利用者は、全員が同じ境遇にあるとは言い難く、障害の有無やコミュニケーションの得意不得意もさまざまである。このため、さまざまな境遇・経歴の人が集うひとのままで、利用者が受容感を感じるためには、ユリさんの語りにある「良い意味の無関心」が必要になってくるのかもしれない。さまざまな経歴を持つ他者が集まるひとのまだからこそ、必ずしも同調的でなければならないわけではなく、目先の小さなことにとらわれず、楽観的な見通しをもつことが大事であるのかもしれない。

第二節 その人なりの働き方を見つけていくためのひとのま

この節では、先ほども挙げた着眼点のうち、3) について論じる。

ユキちゃんは中学卒業後、専門学校や自動車学校、就職支援施設に通っていたが、障害者手帳取得の認定を受けていないため、一般就労障害者枠と福祉的就労のどちらにも当てはまらず、多数の就労支援機関の間でたらいまわしにあっており、働きたいが働けない状態であった。その際、6年間通っていた障害者の就労支援を行っている「いろは」に、まずは高校卒業の資格を取ることを勧められ、定時制高校A校の進学を勧められた。そしてひとのまがA高校の提携校となり、ユキちゃんはひとのまでレポートを作成することで、ユキちゃんは高校卒業の認定を受けることができた。

その後ユキちゃんは、若者向けの就労施設の「たかさぽ」に通っていたが、現在は通っていない様子である。筆者が「サポステとかは行って？」と聞くと、ユキちゃんは「ひどいことを言われるから…私普通じゃないし…仕事の相談をしているのに…」(2018.7.9フィールドノーツ)と語っている。しかし、ユキちゃんはひとのまが休みの火曜日にハローワークへ通っている。そして、その他の日は、自動車学校に通うために学科試験の勉強をしたり、ひとのまでマッサージサロンを開き、ひとのまの利用者にマッサージの施術を行ったりしている。

高屋：ひとのまの人たちってというのは、ユキちゃんのマッサージ師になりたいっていう夢を応援してくれているってことですよね？

ユキ：んー。もちろんそうだと思うんだけど、やっぱ社会のことも考えとるし…うーん、わかんないけど……。いつまでたっても自立できないとかそういうことになったら、ちょっとダメやし、自立するのにちょっと時間もかかるみたいな感じだから。(2017.7.7インタビューより)

ユキちゃんの夢はマッサージ師になることである。そのために、ひとのまでマッサージの施術を行っており、名古屋にあるマッサージの専門学校に通うことも夢として語っている。しかし、マッサージ師になるためには資格が必要であり、専門学校に通うにはそれなりの資金や学力も必要になってくる。現在のユキちゃんにとって現実的に難しいかもしれないが、そんなユキちゃんの夢を少しでも現実にしてくれる場所、そしてその夢を自由に語れる場所がひとのまである。

ただ、ユキちゃんはマッサージ師になることだけでなく、ハローワークに通ったり短期のアルバイトに応募したり、自動車学校に通うために学科試験の勉強をしたりして、自立するために動いている。ユキちゃんの自立にひとのまからの具体的なサポートはないが、ユキちゃんはひとのまに通うことで、自立に向かおうとしている。

ユリさんはカフェでのアルバイトや介護やデイサービスの現場で働くも、どれも人間関係が原因で長期的には働けずにいた。「さくらカフェ」での「生きづらさを語る会」への参加をきっかけに、自身の障害を理解してくれる環境を見つけることができ、ひとのまで

「Café なまけっけ」を開くことで自分の趣味を楽しみながらも「カフェで働く」という自身の夢を実現している。そして現在では、約 1 年間という今までよりも比較的長い期間食堂のパートを継続できており、そこでは「精神的に助けられた」と思えるような上司の存在もある。

ユリさんはカフェでのアルバイトの経験より、「自分はカフェではやっていけない」とカフェで働くという夢を諦めたが、「みやの森カフェ」でコーヒーを出したことで「やっぱりこういう仕事がしたい」と思えるようになった。そして、2016 年夏から現在まで約 2 年間、ひとのまでカフェを開いている。ユリさんは「趣味の延長」としてひとのまでカフェを開いている。カフェを開くことで、ユリさんは“働くことができている自分”を体験でき、働くことのやりがいを見出したり、自己肯定感を感じたりすることができ、その結果として、現在の食堂のパートを続けることができているのではないかと考える。

ただし、宮田さんはひとのまという場所を貸しているだけで、カフェの運営をサポートしているわけではない。そのことが、ユリさんが自分なりにできることを見つけようとすることにつながっているように感じられた。

第二章第三節では、自己肯定感や自己存在価値を高めるための手段として“就労”を挙げ、“就労”と「居場所」には関連性があることを指摘した。これらを参照し、ユキちゃん、ユリさんはどのようにして各々の働き方を探っているのかを考察したい。

ユキちゃんは、過去に通っていた就労支援施設での就職活動は思うようにいかなかった。しかしひとのまでは、ユキちゃんのマッサージ師になりたいという夢を叶えるために、マッサージの練習やその夢を語ること、自動車学校に通うための勉強などを行っている。そのため、就職活動に関しては十分な成果は出せていないが、ユキちゃんは少しずつ自立に向けて動いている。フィールドノーツから記した通り、ユキちゃんはある就職支援施設で「ひどいこと」を言われたそうだ。それが原因でその施設には行かなくなったという。この「ひどいこと」は、ユキちゃんの自己肯定感を否定していると考えられる。このためユキちゃんは、就労することをネガティブにとらえるようになってしまった部分もあるのではないか。それに対し、ひとのまはそもそも就労支援施設ではないが、ユキちゃんを無理に就労させようとはせず、夢を実現するためにマッサージの練習をする場、つまり、ユキちゃんの夢を叶える場として機能している。そのためひとのまは、ユキちゃんの自己存在価値や自己肯定感を高めることのできる場となっているのではないか。そして、その自己存在価値や自己肯定感は、ユキちゃんの就労（というよりは自立）につながっていく可能性がある。

ユリさんは“カフェで働く”という夢をひとのまで実現できている。そして、現在働いているパートも、ユリさんにとっては比較的長期間勤務できている。その理由として、ひとのまでカフェを開くことで“働くことができている自分”を体験できていることを指摘した。このように、ユリさんが“働くことができている自分”を体験できているということや働くやりがいを感じていることは、就労に対しての自己存在価値や自己肯定感を高め

ることにつながっていると考えられる。そして、三橋（2009）は「精神障害者にとっての『居場所』の役割を考えるうえで、精神障害者の就労支援の充実が重要課題であり、それと同時に精神障害者の生活支援の充実を考えていくことも重要課題である」としている。このことから、ユリさんにとってひとのまという「居場所」が充実しているからこそ、現在の就労が充実しているのではないかと考えられた。そして、社会とつながっているという感覚は、自身の障害をオープンにさせる要因にもなったのではないかと考えている。

ユキちゃんとユリさんの事例から、自己肯定感や自己存在価値が就労に結びついていることが分かった。その自己肯定感や自己存在価値を高めてくれる基盤となるのが、彼女たちにとってのひとのまという「居場所」なのではないか。そのため、就労と「居場所」は深く結びついているといえる。

第三節 決断を迫らない場としてのひとのま

ユリさんはパート先の店長に、軽い自閉症であることや人と軽く会話ができないことなどを話しており、店長は「仕事さえできれば」と容認した上で雇っていた。しかし、パートを始めて一年ほど経った現在、ユリさんは他の職員たちと距離があることを店長が気にかけて、昼休憩のときにみんなで輪になって昼食を食べるようになったという。ユリさんはコミュニケーションが苦手であるため、「わざと1人で食べていたのに…」と語っており、ストレスに感じているようだ。タカさんが周りの人に「大丈夫？」と気かけられることが、逆に重荷になっていたこととこのエピソードが似ていると感じた。決断を迫ることや無理に環境になじませようとする、逆に負担に感じる人もいるのかもしれない。ひとのまではそのようなことはないので、ユリさんは居心地が良いと感じているのではない。

タカさんはサラリーマンを辞め、約4か月間車中泊で過ごし、その後ハローワークでひとのまを紹介され、約半年間ひとのまの二階で生活していた。その後ひとのまを出て行き、車中泊に戻った。そんなタカさんのもとへ、市役所職員、宮田さんやユリさんは見舞いに行った。しかし、タカさんは市役所職員が様子を見に来ることを“限界”と感じていたことをユリさんに吐露していた。そのことからタカさんにとって、宮田さんやユリさんが見舞いに行くよりも、市役所職員が様子を見に来るほうが重荷に感じていたのではないかと考えられる。

なぜ、タカさんは市役所職員の見舞いを“限界”と感じていたのか。市役所職員がタカさんのもとを訪れることで、たとえ意図されたことでなくとも、タカさんは、次の行動の決断を迫られているかのように感じていた可能性が考えられる。それに対し、宮田さんやユリさんの見舞いは、お金を貸したり物資を届けたり、近況を聞いてあげたりすることで、早急に現状を変えようとしていないアプローチに結果的になっていたのかもしれない。

第四章で、ひとのまの“支援”スタイルの特徴として「困りごとは必ずしも解決する必要はない」点を挙げた。宮田さんは相談を完全に解決することよりも、その人の悩みが少しでも軽くなることを重視し、その人に寄り添いながら話を聞いている。宮田さんはタカさんがひとのまに来た時に「しばらくここにいたら？（ひとのまにいることに）期限なんてなくていいんだよ。寂しいって思うんだったら寂しくなくなるまでいればいいじゃん」と語っていることから、タカさんにひとのまにいることに期限や目的を設けていないことが伺える。そして宮田さんは、自身の“支援”のことを「人付き合いの延長」と語っている。タカさんが限界と感じていた市役所職員の訪問は、“サービス”の延長のようにタカさんに感じられた可能性があり、それに対し、宮田さんやユリさんは、ひとのまで一緒に過ごしていたタカさんに対する“人付き合い”の延長としての見舞いといえるのではないかと思った。

とはいえ、ひとのまは決断を迫らない場であっても、第一節で述べたように利用者の自立や夢を語ることのできる場であり、ある意味その人の決意を表明できる場である。そのことがタカさんにとって、はっきりと自立を迫ってはないにしろ、圧力を感じる部分もある。

ったのかもしれない。このように、決断を迫らない場と自立や夢を語る場という相矛盾する二つの側面をひとのまは持ち合わせているため、ひとつの空間としてはタカさんのようにひとのまを居場所とできない場合もあると考えられる。

タカさんにとって入所施設に入所したことは最善の選択ではなかったかもしれない。しかし、それでもひとのまは、タカさんにとって次のような点で意味のある場だったと考えられる。まず、何よりもひとのまで約半年間生活したことにより命をつなげることができた。また、ひとのまを出て行ったとしても宮田さんやユリさんがひとのまを出て、タカさんの元へ見舞いに行くという関係性を維持した。タカさんは入所施設で生活しながらも、ユリさんと電話で近況を報告していることから、現在の生活を見守ってくれるユリさんの存在があり、タカさんの細かい動きや変化を察知することができ、今後につながるといえるかもしれない。もし入所施設を退所することとなっても、宮田さんやユリさんとのつながりがあるため、ひとのまに戻ってくるという選択肢をつくることができる。以上のようにみると、ひとのまを居場所とできなくても、通過点として捉え、タカさんにとって意味のある場所だったのではないかと考えられる。

第四節 結語

今回の調査を通して筆者が特に重要だと思ったことは、ひとのまは何かの専門施設ではなく、誰でも集えるコミュニティハウスという単なる一軒家であり、そして宮田さんも“人を救う”という意識がないにも関わらず、結果的にひとのまは多くの利用者を救っていることだ。

もしひとのまのようなみんなの「居場所」がなかったなら、支援制度の谷間にいるような行き場のない人が増えるだろう。ユキちゃんはひとのまで高校卒業の資格を取得することができた。その後も、ユキちゃんは毎日ひとのまに通っている。就労支援という観点からひとのまは表立ったサポートはしていない。しかし、ユキちゃんの夢を自由に形にできる場がひとのまであり、ユキちゃんにとってひとのまに通うということは、今や生活の一部であるのかもしれない。ユリさんのように、ひとのまでカフェを開くことは、これまで苦手としていたコミュニケーションや人付き合いを克服するなど、人間的に成長できるきっかけとなった。さらに、タカさんのようにひとのまが長期的に居場所として機能しなかった例もあるが、住居も財産もない彼にとっては、命をつなげることのできる場となった。

このように、ひとのまは「居場所」としての意味に幅があるため、既存の制度にとらわれず、多くの人を救っている場となっているのではないか。今後ひとのまのような温かい場が全国に増えることを願っている。

<注>

注1：以下（中村 2016）は、中村泰子のインタビューで、宮田さんが発言している部分の引用である。

注2：砺波市にあるカフェ。一般社団法人「Ponte とやま」が運営。カフェは、火・木・金曜に営業している。土曜は、発達障害や介護、認知症などの相談会などのイベントに使われている。

<参考文献・URL>

- ・NHK, 2017年6月24日放送, ETV 特集「ひとのま ある一軒家に集う人々」

- ・木下一雄, 2018, 「社会復帰への困難さを抱える精神障害者を取り巻く現状と課題」『名古屋市立大学社会福祉学科研究紀要』(8): 49-61

- ・厚生労働省, 2015, 「精神障害者保健福祉手帳障害者等級判定基準」
(<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12501000-Nenkinkyoku-Soumuka/0000075346.pdf>)

- ・佐川佳之, 2009, 「不登校支援における「秘密」の機能—不登校児の「居場所」・フリースクールを事例に」『年報社会学論集』(22): 222-233

- ・住田正樹, 2003, 「子どもたちの「居場所」と対人的世界」住田正樹・南博文編『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』九州大学出版会, 3-17, 101-202

- ・住田正樹, 2004, 「子どもの居場所と臨床教育社会学」『教育社会学研究』(74): 93-109

- ・関谷真澄, 2007, 「「障害との共存」の過程とその転換点：精神障害を抱える人のライフストーリーからみえてくるもの」『社会福祉学』47(4): 84-97

- ・中村泰子, 2016, 「『なんにもしません』とっていたらこうなった—コミュニティハウスひとのまを訪ねて」『くらしと教育をつなぐ We』(204): 4-18

- ・ひとのま, 2018, 「コミュニティハウスひとのま」(<http://hitonoma.net/>)

- ・三橋真人, 2009, 「精神障害者にとっての「居場所」の役割」『地域協働：地域協働研究所年報』(6):77-84 愛知江南短期大学地域協働研究所

- ・宮田隼, 2018, 「場所があって、人が来る。—『コミュニティハウスひとのま』の6年」『くらしと教育をつなぐ We』(211): 27-32

- ・一般社団法人 Ponte とやま, 2018, 「みやの森カフェ」(<https://ponte-toyama.com/cafe/>)